

しも きた かた しも ごう だい なな い せき
下北方下郷第7遺跡
しも きた かた しも ごう だい はち い せき
下北方下郷第8遺跡



2022
宮崎市教育委員会

しも きた かた しも ごう だい なな い せき
下北方下郷第7遺跡
しも きた かた しも ごう だい はち い せき
下北方下郷第8遺跡

2022
宮崎市教育委員会

序 文

本書は、平成 27、平成 28 年度に住宅建築にともなって発掘調査を実施した下北方下郷第 7 遺跡、下北方下郷第 8 遺跡の発掘調査報告書です。

この 2 つの遺跡は、平和台公園にほど近い宮崎市下北方町にある遺跡です。この下北方町では、弥生時代の環濠集落である下郷遺跡、国指定重要文化財となつた遺物が出土した下北方 5 号地下式横穴墓、平安時代の寺院跡とみられる建物が確認された下北方塙原第 2 遺跡など非常に多くの遺跡が確認され、まさに「歴史のまち」と言えるような地区となっています。

遺跡をはじめ、各地域の歴史を今に伝える文化財は、どれ一つ同じものではなく、それぞれが本市にとってかけがえのない固有の財産です。それと同時に、今を生きる私たち、そして未来を生きる人々が、地域への愛着や誇りを育むための重要な要素の一つでもあります。地域に残る文化財を保護し、後世に繋いでいくことは、本市にとっても重要なことであり、これらについてみなさんとともに考え地域の歴史、文化財を大切に守り伝えていきたいと思います。

本書が、その一つのきっかけとなり、宮崎市の歴史、文化を守り伝えていくことの一助となれば幸いです。

令和 4 年 3 月
宮崎市教育委員会教育長
西田 幸一郎

例　　言

1 本書は、宮崎市教育委員会が平成 27 年度に実施した下北方下郷第 7 遺跡、平成 28 年度に実施した下北方下郷第 8 遺跡の発掘調査報告書である。

2 発掘調査、整理作業はそれぞれ以下の期間実施した。

【下北方下郷第 7 遺跡】

発掘調査 平成 27 年 9 月 9 日～ 10 月 2 日

整理作業 平成 29 年 1 月 10 日～ 2 月 23 日

【下北方下郷第 8 遺跡】

発掘調査 平成 28 年 7 月 25 日～ 9 月 20 日

整理作業 平成 29 年 1 月 11 日～ 3 月 22 日、平成 30 年 2 月 1 日～ 3 月 20 日、令和 3 年 3 月 3 日～ 3 月 18 日
令和 3 年 6 月 1 日～ 6 月 14 日

3 調査組織

【下北方下郷第 7 遺跡】

調査主体 宮崎市教育委員会

現地調査（平成 27 年度） 整理作業（平成 28 年度）

総括	文化財課長	日高 貞幸	総括	文化財課長	日高 貞幸
理藏文化財係長	井田 篤		副理藏文化財係長	井田 篤	
調整主任	査	島枝 誠	調整主任	査	金丸 武司
事務主任	主事	谷口 広清	事務主任	主事	武富 知子
担当主任	技師	竹中 克繁	担当主任	査	竹中 克繁
嘱託		黒木 宏多	嘱託		小野 貞子
			嘱託		小牟田智子

【下北方下郷第 8 遺跡】

調査主体 宮崎市教育委員会

現地調査（平成 28 年度） 整理作業（平成 29、30、令和 3 年度）

総括	文化財課長	日高 貞幸	総括	文化財課長	羽木本光男（H29）
副理藏文化財係長	井田 篤		文化財課長	富永 英典（H30）	
調整主任	査	金丸 武司	文化財課長	白坂 敦（R 3）	
事務主任	主事	武富 知子	副理藏文化財係長	井田 篤（H30より主幹兼埋蔵文化財係長）	
担当主任	技師	西嶋 剛広	調整主任	査	金丸 武司（H29）
嘱託		大嶋 昭海	主査		稻岡 洋道（H30）
嘱託		川野 誠也	主査		石村 友規（R 3）
嘱託		黒木 星佳	事務主任	主事	武富 知子（H29）
				主事	杉尾 悠（H30）
				主事	高田 真帆（R 3）
			担当主任	技師	西嶋 剛広（R 1より主査）
			嘱託		小野 貞子（R 2より会計年度任用職員）
			嘱託		徳丸 理奈（R 2より会計年度任用職員）

4 本書の執筆は、第 1、3 部を西嶋が、第 2 部を竹中がおこなった。編集は西嶋がおこなった。

5 揭載した図面のうち、現場における実測は竹中、西嶋、大嶋、黒木がおこなった。遺物の実測は竹中、西嶋、小野、小牟田、徳丸が整理作業員の協力を得ておこなった。

6 現場および出土遺物の写真撮影は竹中、西嶋、大嶋、黒木がおこなった。表紙および 74 ページ中段左の写真は牛鶴茂氏の撮影である。現地における空中写真撮影は（有）スカイサーべイ九州に委託した。

7 本書の図で示す方位記号はすべて真北を示す。

8 本書で使用する遺構略号は右記のとおりである。竪穴建物： S A、土坑： S C、溝状遺構： S E、ピット： S H。

9 本調査における出土遺物、実測図、撮影写真などはすべて宮崎市教育委員会で保管している。

本文目次

第1部 下北方町周辺の位置と環境

第I章 地理的環境

第1節 宮崎市の位置と環境 3

第2節 下北方町の位置と環境 3

第II章 歴史的環境

第1節 下北方遺跡 5

第2節 各時代の遺跡 5

第2部 下北方下郷第7遺跡

第I章 調査に至る経緯 9

第II章 調査成果

第1節 調査成果の概要 10

第2節 古代・中世の遺構 10

第3節 その他の遺構と遺物 12

第III章 まとめ 16

第3部 下北方下郷第8遺跡

第I章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯 23

第2節 調査の経過 23

第II章 調査の成果

第1節 調査地周辺の地形と成果の概要 25

第2節 調査地の基本土層 25

第3節 繩文時代早期・旧石器時代の遺物 28

第4節 古代以降の遺構と遺物 29

第5節 遺構外出土遺物 51

第III章 まとめ

第1節 確認された遺構と遺物 57

第2節 墨書き土器について 57

第3節 溝状遺構1と下北方塚原第2遺跡 57

第4節 古代下北方丘陵の様相と展望 59

挿図目次

【第1部】

第1図 周辺の地形と遺跡 4

【第2部】

第1図 周辺地形図 9

第2図 遺構配置図 11

第3図 調査区土層図 13

第4図 溝状遺構(SE1)出土遺物 14

第5図 その他の出土遺物 14

【第3部】

第1図 調査区位置図 24

第2図 調査区平面図 26

第3図 調査区北壁土層図 27

第4図 繩文時代早期・旧石器時代の遺物 28

第5図 土坑8、9、10、11実測図 30

第6図 土坑12、13、15、16、17実測図 31

第7図 土坑18、19、20、21、22、23実測図 33

第8図 土坑出土遺物実測図 34

第9図 溝状遺構1実測図 38

第10図 溝状遺構1出土遺物実測図① 39

第11図 溝状遺構1出土遺物実測図② 40

第12図 溝状遺構1出土遺物実測図③ 41

第13図 溝状遺構1出土遺物実測図④ 42

第14図 溝状遺構2、4、5、14断面図 47

第15図 溝状遺構出土遺物実測図 48

第16図 ピット出土遺物実測図 50

第17図 遺構外出土遺物実測図① 52

第18図 遺構外出土遺物実測図② 53

第19図 下北方下郷第8遺跡と下北方塚原第2遺跡の位置関係 58

第20図 下北方の主要古代遺跡 59

表目次

【第2部】

第1表 出土土器観察表 15

第2表 出土陶磁器観察表 15

第3表 出土瓦観察表 15

【第3部】

第1表 出土土器観察表① 54

第2表 出土土器観察表② 55

第3表 出土陶磁器観察表 56

第4表 出土瓦観察表 56

第5表 出土石器観察表 56

図 版 目 次

【第2部】

図版1 調査区全体、南側調査区、北側トレンチ	18
図版2 深掘箇所、溝状遺構(SE1)断面、溝状遺構(SE1)	
.....	19
図版3 溝状遺構(SE1)出土遺物、その他の出土遺物	
①、その他の出土遺物②	20

【第3部】

図版1 下北方下郷第8遺跡調査区空撮写真	61
図版2 縄文時代早期、旧石器時代の遺物	62
図版3 土坑8、9、10、11	63
図版4 土坑12、13、15、16、18	64
図版5 土坑17、19、20、21、22、23、土坑出土遺物	65
図版6 溝状遺構1①	66
図版7 溝状遺構1②	67
図版8 溝状遺構	68
図版9 溝状遺構1出土遺物①	69
図版10 溝状遺構1出土遺物②	70
図版11 溝状遺構1出土遺物③	71
図版12 溝状遺構1出土遺物④	72
図版13 溝状遺構、ピット出土遺物	73
図版14 遺構外出土遺物、墨書き土器、煤付着土器	74

第1部 下北方町周辺の位置と環境

第1章 地理的環境

第1節 宮崎市の位置と環境

宮崎県宮崎市は九州南東部にある。宮崎平野南半の大部分を占めており、河川流域でいえば大淀川下流域に位置する。宮崎市域は北を一つ瀬川、南は鰐塚、徳蘇山系、東は日向灘、西は九州山地の一部を限りとする。地形は、山地から派生する丘陵や段丘面と河川の作用によって形成された沖積地、海岸線に伸びる4本の砂丘列とその後背湿地などがあり、地区ごとに多様である。また、市域には幾筋もの河川が流れているが、大淀川、石崎川、清武川などが主要な河川である。

第2節 下北方町の位置と環境

今回報告する下北方下郷第7遺跡、下北方下郷第8遺跡は、宮崎市下北方町下郷に所在する。下北方町は宮崎市街地北西部にあり下北方丘陵と通称される丘陵状地形とその眼下に広がる沖積地が存在する。下北方丘陵は、北にある垂水台地から南に派生する丘陵状地形である。その南端部付近は段丘面でおおよそ平坦な地形をなしており、標高は20から30m、段丘面下の沖積地との比高差は約10mである。沖積地は大淀川の作用で形成された地形で、微高地と低地が複雑に入り混じっていた環境であったものと推測され、市街化した現在もわずかに地形の起伏を観察できる地点がある。

遺跡が存在するのは、このうち下北方丘陵南端付近の段丘面上である。この付近からは眼下に大淀川や宮崎市街地を、遠くは徳蘇、鰐塚山系、日向灘、霧島連山をみることもできる眺望の地である。

加えて、下北方丘陵は大淀川を利用した河川交通、北方の西都市方面および西方の国富町方面へと通じる陸路の結節点でもあることから、交通の要衝という地理的環境にある。



空からみた下北方丘陵（南西から）



第1図 周辺の地形と遺跡(S=1:25000)

第Ⅱ章 歴史的環境

第1節 下北方遺跡

下北方丘陵上は、これまでに多くの埋蔵文化財包蔵地が確認されている。当該地区的埋蔵文化財包蔵地については、試掘調査等で新たに埋蔵文化財の存在が確認された地点について、個別に周知の埋蔵文化財包蔵地として把握されてきた。

しかし、これらの試掘調査結果や丘陵上全域に遺物が散布しているような状況などから丘陵全体に埋蔵文化財が存在するものと判断されるにいたった。そのため、より適切な埋蔵文化財保護の観点から、現在は、丘陵のほぼ全域を「下北方遺跡」として一括した周知の埋蔵文化財包蔵地として取り扱っている（第1図）。現在までに旧石器時代から近現代におよぶ各時代の遺構や遺物が確認されている。

第2節 各時代の遺跡

旧石器時代、縄文時代のまとめた調査事例はないものの、近年遺構や遺物が確認されている。旧石器時代の遺物はいずれも姶良丹沢火山灰層上位の石器群で、下郷遺跡では剥片尖頭器や三稜尖頭器、下北方花切第2遺跡では小型ナイフ形石器、下北方下郷第6遺跡では、小型ナイフ形石器、角錐状石器などが出土した。縄文時代の遺構、遺物には集石遺構が下郷遺跡、下北方花切第2遺跡で確認されたほか、下郷遺跡、下北方塚原第3遺跡では押型文土器や塞ノ神式土器が、下北方戸林第1遺跡や下北方9号墳表土から孔列文土器が出土した。

弥生時代には、丘陵東端にある下郷遺跡で環濠集落が形成された。環濠は弥生時代前期後半と後期の2時期に機能していた。遺物には絵画土器や瀬戸内系土器など地域の拠点集落として広域の交流がおこなわれていたことを示すものが確認できる。この下郷遺跡の西側にある下北方下郷第6遺跡では弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての大溝が確認され、多量の土器が出土した。大溝は方形区画をなす可能性が指摘されており、大変注目される。

古墳時代には、丘陵上およびその周辺で下北方古墳群が築造される。古墳時代中期前半から後期前半にかけての古墳群で、市域で初めて円筒埴輪を採用した古墳群であることや高塚古墳と地下式横穴墓が同一墓群中に混在していることなど宮崎平野部の古墳群の特徴をよく示している。群中の下北方5号地下式横穴墓は、多種多量な副葬品が出土した中期古墳として著名であり、当時の九州南部の古墳文化を知るうえで重要な存在である。下北方古墳群の築造終了後には、周辺では下北方横穴群、池内横穴群など横穴群が形成される。

古代には、今回報告する下北方下郷第8遺跡に隣接する下北方塚原第2遺跡で古代寺院と目される2棟の大型掘立柱建物が確認された。周辺では、そのほか大型柱掘方列やコップ形須恵器が確認された下北方下郷第4遺跡や墨書き土器が出土した下北方塚原第1遺跡、下北方花切第2遺跡、当該期の多くの竪穴建物が確認された下北方花切第2遺跡、下北方下郷第9遺跡などがあり、丘陵周辺が古代の宮崎郡の中で中心的な地区であったことを強く示唆する。

中世の下北方丘陵については不明な部分が多い。丘陵北方の池内地区には、宮崎城跡が存在する。建武3（1336）年が文献上の初出となる山城で、島津氏時代の城主上井覺兼が在城時代に記した『上井覺兼日記』の詳細な記述の存在と保存状態の良好な遺構が宮崎城跡を中世山

城研究上稀有な存在たらしめている。宮崎城は豊臣秀吉の国割の後には延岡藩領となり、元和元(1615)年の一国一城令によって廃城となる。また、『上井覚兼日記』によれば、天正14(1586)年10月8日には島津豊久をともなって下北方沙汰寺にある平景清墓をたずねているが、これはまさに上記の下北方塚原第2遺跡の位置である。

近世においても下北方地区は引き続き延岡藩領となっており、現在の大宮中学校敷地に代官所が置かれたといわれている。また、神武天皇の寓居跡との伝説がある皇宮神社には、延岡藩の代官であった滝口常裕によりその由来を記した経塗記が建立されるなどしている。加えて、一時期天領になった際には幕府陣屋が設置されている。そのほかにも近世の遺構が多く確認されており、当該時期においても当地域が宮崎の政治の中心であったことを示している。

近現代には政治の中心は現在の宮崎市街地へ移っていくものの、昭和15(1940)年には現在の平和台公園に八紘基柱(現在の平和の塔)が、皇宮神社には皇軍発祥の地碑が建立される。これらの現在的な位置付けは別にしても近現代日本史を知る上で重要な存在であるといえよう。なお、平和の塔は昭和39(1964)年の東京オリンピック聖火リレーの起点の一つとなつたことも知られており、現在では県内の主要な観光地の一つとなっている。

【参考文献】

東京大学史料編纂所編 1955 『大日本古記録 上井覚兼日記 下』岩波書店



景清廟



下北方塚原第2遺跡
(奥が下北方下郷第8遺跡)

第2部 下北方下郷第7遺跡

第Ⅰ章 調査に至る経緯

平成 27 年 5 月 7 日、宮崎市下北方町における宅地造成の計画にともない、事業者より規定の様式にて宮崎市教育委員会あてに文化財の有無照会がなされた。計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地「下北方遺跡」であることから、宮崎市教育委員会は同年 6 月 29・30 日に同所での確認調査を実施し、古代の竪穴建物や溝状遺構、土坑、ピット等の遺構とともに、土師器、須恵器等の遺物を確認した。

この調査結果をもとに事業者と文化財の取り扱いに関する協議をおこない、計画地約 700m²のうち 9 割以上の範囲については工事掘削が文化財に影響する深さに及ばない計画であるため、現地保存となった。しかし計画地の西辺については工事掘削が遺構面まで及ぶのを避けられないことから、この約 45m²を対象として本発掘調査による記録保存を行うこととなった。

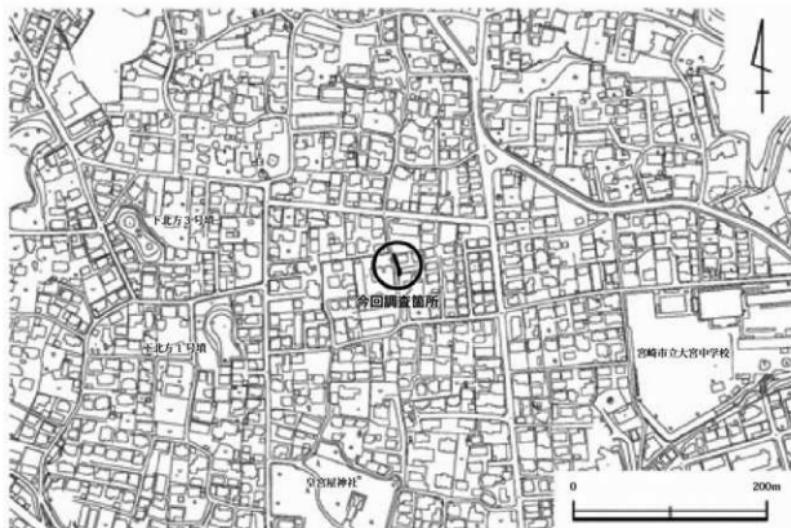
以上の経緯により、本発掘調査を平成 27 年 9 月 9 日から 10 月 2 日まで実施した。なお発掘調査にかかる文書手続きは以下のとおりである。

工事届 平成 27 年 8 月 25 日（宮教文第 504 号 1 にて県教育長あて進達）

着手報告 平成 27 年 9 月 18 日（宮教文第 597 号）

発見通知 平成 27 年 10 月 5 日（宮教文第 598 号）

保管証 平成 28 年 4 月 26 日（宮教文第 117 号）



第1図 周辺地形図(S=1:5000)

第Ⅱ章 調査成果

第1節 調査成果の概要

調査区は長 12.7m、幅 1.2m の南北に伸びるトレントの南端に、南北 7.8m、東西最大 2.7m の五角形状の調査区が接続する平面形で、調査面積は 33.2 m² である。プラスチック片等の混じる客土は厚く、おむね現地表より 0.5 ~ 0.8m の深さまで入り、場所によっては深 1.1 m までが客土となる（第3図1～3層）。その下に黒色土による遺物包含層（同4層）が厚 0.2m ほどで堆積し、以下は漸移層（同5・6層）を経て地山（同7・8層）となる。調査区北半のトレント部分にて地山の堆積を確認する深掘りを 2ヶ所で行ったところ、検出面から 0.1 ~ 0.4m までは灰黄褐色のローム土、以下は明黄褐色のローム土となる。

地表面にて検出された遺構は溝状遺構 1条、土坑 1基、ピット 13基、および落ち込み 1基である。計画地全体を対象とした確認調査では竪穴建物等も検出されているが、今回の本調査対象範囲では、それらの遺構は確認されなかった。遺物は溝状遺構から出土したもの以外は、すべて客土および包含層からの出土である。

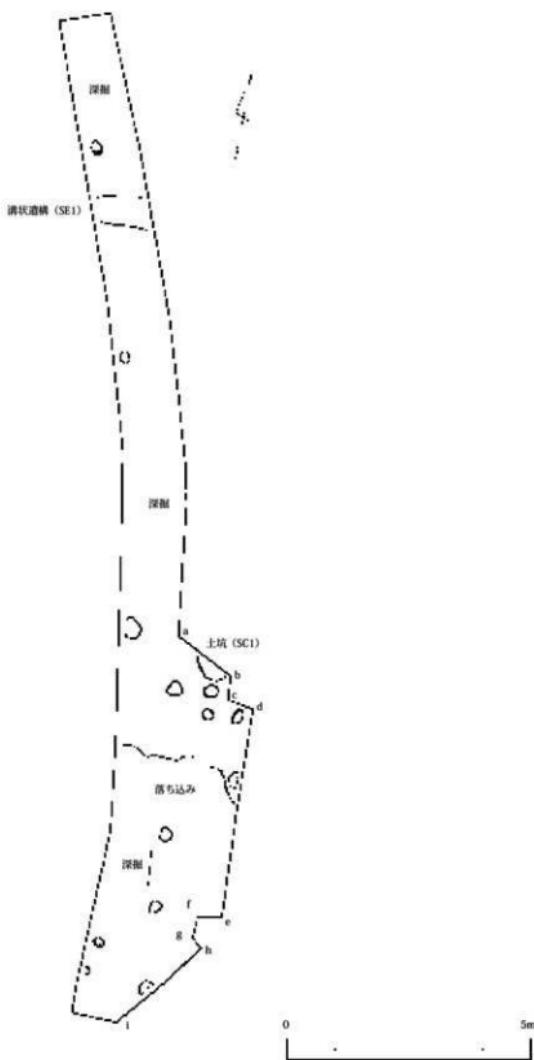
第2節 古代・中世の遺構

溝状遺構 (SE1) 調査範囲北半のトレント部分北側にて、東西方向に伸びる幅狭の溝状遺構を検出した。検出面における幅は 0.5m、底面は平坦に近く幅 0.3m である。壁面は垂直に近く立ち上がるが、南側の壁は地山検出面から 0.7 m の深さで底面となるのに対し、北側は地山面がこの溝状遺構に向かって緩やかに下降傾斜しているため、深 0.3 ~ 0.4 m となっている。

この溝状遺構埋土中よりは、薄手の須恵器壺胴部片（第4図1）、青磁片（同図2）、土師器壺底部片（同図3）が出土している。須恵器壺片は内面に同心円状當具痕があり、外面には格子目タタキが施されるが、宮崎県内の須恵器におけるこのタタキ具のセット関係は、8世紀代の宮崎市松ヶ迫窯跡まで認められる〔今塩屋・秋成 2006〕。青磁は平底皿かと思われ、内面に劃花文と思われる文様の一部が認められ、12世紀代の龍泉窯系の製品と思われる。土師器壺片はヘラ切底であるが、12世紀の糸切り技法出現以降も中世全般を通じてヘラ切が存続することが宮崎平野部における土師器壺の特徴であり〔岡本 1995、堀田 2016〕、底部片のみの出土では年代を絞り込むことが困難である。

遺構の時期については、出土遺物が少なく、またその年代観の差が大きいため、機能した時代を特定するのは難しいが、少なくともその埋没した年代は青磁平底片が示す 12世紀代ないしそれ以降ということになる。

この溝状遺構の機能としては、ある程度の深さは持つものの極めて幅狭な小規模な溝であるため、屋敷地等の区画溝や中世館の防護目的を持った堀のようなものとは考えにくい。溝状遺構北側に見られる地山面の傾斜は、雨水等を効率良く集めるため人為的に削られたものかと思われ、この溝状遺構の機能は排水のためのものと考えられる。なお地山面の傾斜は、この溝状遺構から 3 m 以上離れた調査トレント端からすでに始まっており、排水溝にともなう地山の人為的な整形は、比較的広範囲で施されているようである。



第2図 遺構配置図(S=1:100)

第3節 その他の遺構と遺物

土坑（SC1） 調査区北東の壁際で土坑1基が検出された。平面の半分以上が調査区外となるため全形は不明であるが、検出範囲での最大径は0.7mである。深さは0.1mにも満たず、遺物の出土もない。

ピット 今回調査範囲の全体でピット13基が検出されている。検出面での直径は0.2～0.45mで小型のものが多く、特筆すべき大きさのものはない。調査区が狭小なため明確な建物等の並びは見出し難い。その中で調査区南端中央付近の、ほぼ直線上の南北に並ぶ3基は、上端径0.3m前後でそれぞれの間が1.6m前後と比較的揃っており、掘立柱建物や柵等の一部となる可能性はある。ただし調査区東壁と西壁とはそれぞれ1.3mと1.2mであり、対になる並びがあるかどうかは不明である。

落ち込み 調査区南半の南側では、落ち込みを検出した。三方が調査区外となり全形はおろか平面形も不明であるが、南北は5.4m以上の規模である。他の地山検出面から0.15mほどとの高低差をもって比較的平坦な床面となる。壁面の立ち上がりは角度があり明瞭である。調査区東壁近くでは緩やかなカーブを描いており、コーナー部かとも思われるが、上端、下端ラインとともに平面形は不整形である。埋土は北側のトレンチ部分でも地山との境に認められる黒色土とローム土との漸移的な様相の土である。また床面における硬化面の形成等も認められず、明確に人為的な遺構とは断定できなかった。

客土・包含層出土の遺物（第5図） 今回調査における出土遺物のほとんどは客土、包含層より出土したものであり、その時代も幅が広い。以下にその様相を略述する。

4は土師器甕の口縁部片である。緩やかに弧を描いて外反する形状で、外面口縁部は横ナデ、胴部は縱方向のナデが施される。7世紀代の在地系の長胴の甕と思われる。

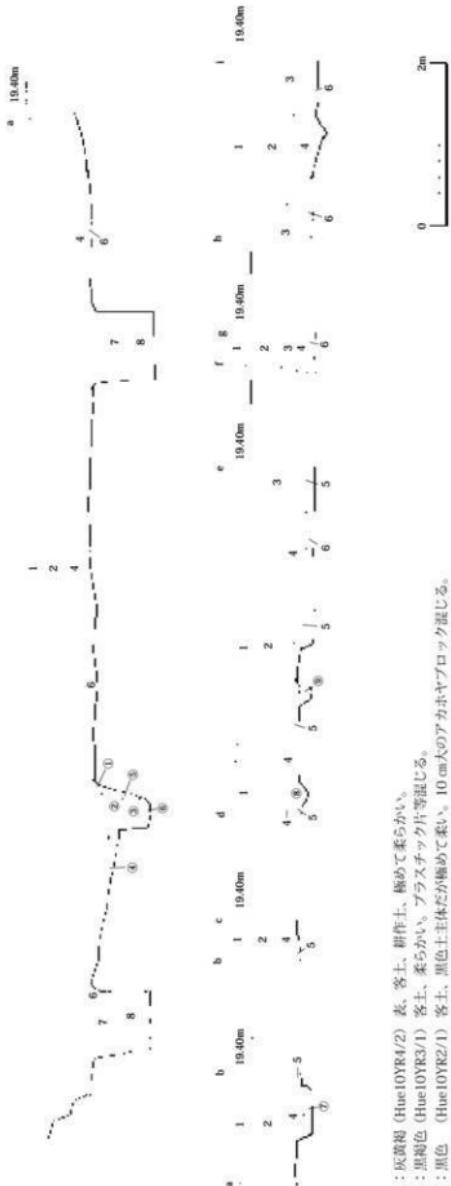
5～9は甕の底部片である。5は外面に横方向のタタキが認められ、底部を欠くものの残存部位から復元される傾きから、尖底状の形状と思われる。6・7は平底で、7はやや薄手の上げ底状になっており、外面に縱方向のハケ目と思しき痕跡がある。8・9は器壁の厚い小平底で、9の外面にはススの付着が認められる。6・7は弥生時代終末期から古墳時代前期前半、5・8・9は古墳時代前期後半に比定される。

10は古墳時代の土師器碗片と思われる。残存部位の上部は極めて薄くなることから口縁端に近い。内外面ともに磨滅が激しく、調整は不明である。

11は15世紀後半から16世紀代の青花皿である。外面に波瀾文、内面に圓線が描かれる。

12・13は中世の土師器壺である。12は底部に植物質の圧痕があり、かつ粗いナデが施される。残存部位は少ないものの、やや内湾気味に立ち上がる体部を持つものと思われる。13は糸切り底の土師器壺で、堀田孝博氏が作成した宮崎平野部における土師器供膳具編年案のⅦないしⅨ期（13世紀後葉～14世紀代）に比定される〔堀田前掲同〕。

14は器厚2cm弱とやや薄手の瓦片である。全体的に磨滅が激しいものの、凸面は平滑に整えられ、端部の面形成がしっかりしているなどの特徴は見て取れる。近世瓦と思われるが、資料中に炭素が吸着した箇所が見られない赤焼けであり、18世紀以降の棟瓦ではなく本瓦葺きの平瓦と考えられる。

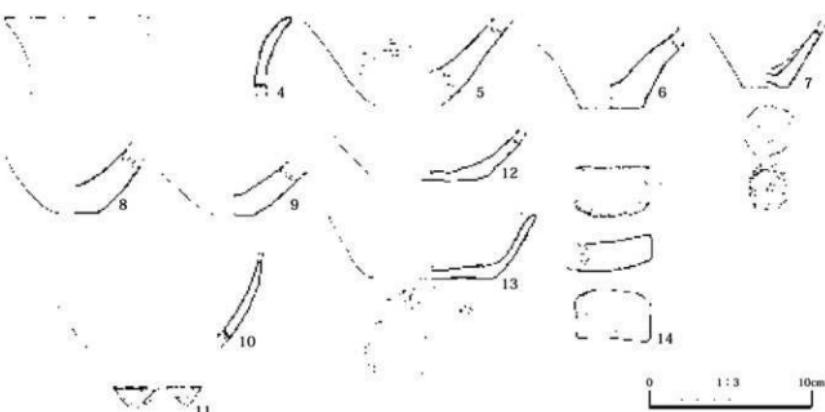


- 1: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) 表、客土、耕作土、極めて柔らかい。
- 2: 黑褐色 (Hue10YR3/1) 多土、柔らかい。プラスチック片等混じる。
- 3: 黒色 (Hue10YR2/1) 客土、黒色土主体だが極めて柔い。10 cmのアカホヤ粒子がまばらに含有。
- 4: 黒色 (Hue10YR2/1) ややローム化しており比較的硬い。Φ 1 cmのアカホヤ粒子を斑状に含有。
- 5: 黑褐色 (Hue10YR3/2) 黒色土にロームが混じる。アカホヤ粒子を斑状に含有。
- 6: 暗褐色 (Hue10YR3/3) しまりあるがやや柔らかい。黒色土とロームの漸移層。
- 7: 灰黄褐色 (Hue10YR6/2) 地山ローム。
- 8: 明黃褐色 (Hue10YR7/6) 地山ローム。
- ①: 灰黄褐色 (Hue10YR6/2) しまり、粘性あり。肩口の崩れ土。
- ②: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) アカホヤ粒子少量含有。しまり、粘性あり。
- ③: 灰黄褐色 (Hue10YR4/2) Φ 1 mmのアカホヤ粒子含有。しまり、粘性あり。
- ④: 褐色 (Hue10YR6/1) 黒色土中にロームが斑状に入る。
- ⑤: 灰黄褐色 (Hue10YR6/2) 粘性、アカホヤ粒子多量に含有。
- ⑥: 灰黄褐色 (Hue10YR6/2) 粘性高い。含む物ほとんど無し。
- ⑦: 黑褐色 (Hue10YR3/2) 地山ローム。
- ⑧: 黑色 (Hue10YR2/1) やや柔らかい。アカホヤ粒子多量に含有。
- ⑨: 黑褐色 (Hue10YR3/2) 比較的硬くしまる。ローム主体土にアカホヤ粒子が混じる。

第3図 調査区土層図(S-1 : 60)



第4図 溝状遺構(SE1)出土遺物(S=1:3)



第5図 その他の出土遺物(S=1:3)

【参考文献】

- 今塩屋毅行・秋成雅博 2006年「松ヶ迫窯跡の再検討」『宮崎考古』第20号 宮崎考古学会
今塩屋毅行 2016年「日向国における奈良時代の土器相」『宮崎県央地域の考古資料に関する編年研究Ⅱ』 平成27年度宮崎考古
学会研究会発表要旨 宮崎考古学会
岡本武憲 1995年「九州南部」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
甲斐康大 2014年「宮崎平野北部における古墳時代開始期の土器について」『宮崎県央地域の考古資料に関する編年研究』宮崎考
古学会
河野裕次 2019年「宮崎平野南部における弥生時代後期から古墳時代前期の土器様相」『宮崎考古』第29号 宮崎考古学会
田中克子 2011年「博多遺跡群出土の中国陶磁器と対外貿易」『博多研究会誌 20周年記念特別号』博多研究会
堀田孝博 2016年「宮崎平野部の中世土師器」『宮崎県央地域の考古資料に関する編年研究Ⅱ』 平成27年度宮崎考古学会研究会
発表要旨 宮崎考古学会

第1表 出土土器観察表

施設名 固番号	番号	遺構等	幅 厚	法面 (cm)	周長 (cm)	高さ (cm)	外 面	内 面	焼成	調 型				出土 (上: 灰陶下: 黑陶)	備考	実測 番号	
										外面	内面	A	B	C	D		
P14 第4回	1	SE1	直筒	1.5	—	—	施灰	施灰	良好	施灰目タキ	同心円状	—	—	少	—	自然端あり	12
	3	SH1.2	直筒	—	(5.8)	—	に凸(凹)	に凸(凹)	良好	摩耗著しく調節不明	摩耗著しく調節不明	—	—	—	—	ヘラ切り底	2
	4	—	直筒	(17.5)	—	—	に凸(凹)	に凸(凹)	良好	粗いナデ	ナデ	4	—	—	—	7世紀式	3
P14 第5回	5	—	直筒	—	—	—	施灰	施灰	良好	タキナナゲ	ナデ	—	—	—	—	古墳時代前段後半	13
	6	—	直筒	—	(4.0)	—	に凸(凹)	に凸(凹)	良好	ナデ	工具ナデ ナナゲ	—	—	—	—	既而植物質灰陶、浮彫刻未一点追加前半	4
	7	—	直筒	—	2.85	—	に凸(凹)	に凸(凹)	良好	ハケ目	工具ナデ	2.5	—	—	—	近世(?)込み、赤土野窯一古墳時代前段後半	6
	8	—	直筒	—	2.8	—	に凸(凹)	施灰	良好	ナナゲ	ナナゲ	—	—	—	—	既而ナナゲ、心窓時代前段後半	5
	9	—	直筒	—	2.45	—	に凸(凹)	施灰	良好	ナナゲ	ナナゲ	—	—	—	—	外表面又付灰陶、心窓時代前段後半	7
	10	—	直筒	—	—	—	に凸(凹)	相	良好	摩耗のため不明	摩耗のため不明	3	2	多	少	古墳時代	8
	12	—	黑色土器 环	—	(5.7)	—	に凸(凹)	施灰	良好	回転ナデ	回転ナデ	—	—	—	—	既而植物質灰陶	14
	13	—	直筒	(13.3)	7.75	3.95	に凸(凹)	灰黄陶	良好	回転ナデ	回転ナデ	—	—	—	—	系切り底	1

単位: A. 斧跡 B. 小石 C. 白石 D. 石斧 E. 黑陶

第2表 出土陶磁器観察表

施設名 固番号	番号	遺構等	幅 厚	面 面	法面 (cm)	周長 (cm)	高さ (cm)	焼成	地盤	時期	備考	実測 番号	
P14 第4回	2	SE1.1	直筒	平底	—	—	—	—	斂口深腹	12世紀か	内面磨花文	11	
P14 第5回	11	—	直筒	直花	田	—	—	—	—	—	16世紀	外表面波文、内面磨擦線	9

第3表 出土瓦観察表

施設名 固番号	番号	遺構等	面 面	法面 (cm)	周長 (cm)	高さ (cm)	焼成	地盤	時期	備考	実測 番号	
P14 第5回	14	—	直筒	平底	—	—	—	—	ナデナ	ナデナ	—	—

第Ⅲ章　まとめ

今回調査においては調査区が極めて狭小なこともあり、検出された遺構はやや希薄であった。掘立柱建物としてのピットの並びを検討することも難しく、当該地の土地利用について復元できるほどのデータとは言い難い。比例して遺物の出土も多くはないが、その内訳は古墳時代の土師器碗や甕、古代の須恵器、中世の青磁、青花、土師器坏、そして近世の平瓦と極めてバラエティーに富み、長期にわたる各時代の遺物がまんべんなく出土している。このことは全時代的な遺構、遺物を含む当段丘面、下北方遺跡の特徴を如実に表したものと言える。当地は現在に至るまで長きに渡り人々の活動の場であり続けているが、その歴史を概観すると地域における政治的中心地としての性格が強い。

弥生時代には環濠集落の下郷遺跡があり、現在宮崎市指定文化財となっている線刻の絵画土器が出土している。続く古墳時代には、前方後円墳5基を含む下北方古墳群が段丘面上を中心に分布し、地域における政治的な中心地としての性格が視覚的にも明確になる。円墳である9号墳にともなう下北方5号地下式横穴墓からは、重要文化財に指定されている多彩な副葬品が出土し、その被葬者像として大和政権に直結して海外との外交に従事した人物との分析がなされている〔宮崎市教委編2020〕。また段丘面を見下ろす越ヶ迫丘陵上に築かれた13号墳は、古墳時代後期における列島最南端の100m級前方後円墳である。

続く古代になると、当地一帯は現在の県名へつながる「宮崎」の名で呼ばれるようになつた。段丘面上には古代瓦が散布し、古くより律令制下における郡支配の拠点である宮崎郡衙の存在が想定されてきた。これまでの発掘調査においても大型掘立柱建物などが検出されており、地域の核となる特筆すべき場所であったことがうかがわれる。ただし明確に郡衙の存在と直結する遺構、遺物は今までのところ確認されてはいないため、今後も発掘調査によるデータの積み重ねはもとより、多角的な検討、分析を行なって古代における当地の性格を明らかにしていく必要がある。

中世においては、地域における明確な政治的中心地としての性格はやや薄れる。地域支配の核である中世城館は、当段丘面にはつくられていない。宮崎県を含む九州南部には台地を立地の主とする南九州の群郭式城郭と呼ばれる特徴的な山城が分布するが、下北方の段丘面は麓からの比高差がわずかに10m強で防衛に優れた地形とは言えず、城を構えるには適さなかった。当地一帯の支配拠点としては、北に2.5kmほどの位置にある宮崎城跡（池内町、大字上北方）がその核となっていた。宮崎城は南北朝期の軍忠状からその名が登場し、戦国期末の宮崎城主が記した『上井覚兼日記』が著名である。この日記には当地に所在した沙汰寺や名田八幡社などの寺社の存在が度々記されているが、これは中世における当地の性格を考える上で重要である。宮崎城における戦国期の城下町構造を検討した千田嘉博氏は、寺社は領主としての面をもち、それぞれが職人を抱え門前の市町とともに交易・流通に関わっていた可能性が高いとし、これら沙汰寺をはじめとする寺社の分布圏がゆるやかな宮崎城下域を構成したと考察している〔千田2004〕。中世における当地は地域支配の拠点とは言えないまでも、やはり地域の核のひとつであったと言える。

近世における当地一帯は延岡藩の飛地領としての期間が長く、段丘面上には延岡藩の代官所

という明確な地域支配の拠点が置かれた。また天領に転じた時期も複数回あり、18世紀半ばの数年間は幕府陣屋（日田代官の出張詰所）が設置されて、日向国における幕府領支配の拠点ともなった。今回調査においては本瓦葺きと思われる平瓦が出土している。下北方の代官所や幕府陣屋が瓦葺であったかどうかは明らかではなく、また段丘面上には寺社も存在するため、この瓦片がこれら近世における地域支配の拠点に関連するものかどうかは分からぬが、当地が瓦葺という特筆すべき建物の建つ、地域の中心と位置付けられた場所であったことを明確に示すものである。

当地はここまで述べたように地域における政治の中心という性格を持ち続けた場所であり、地域の歴史を考える上で極めて重要な文化財の包蔵地である。同時に、現在も住宅街として人々の生活の場であり続けているため、市内でも群を抜いて工事件数の多い地域でもある。文化財保護行政としては、今後も1件1件丁寧に現状保存、記録保存を行っていくことが重要である。また記録保存の措置を取る際は、今回のように調査面積が狭小な場合も少なくないが、ひとつひとつデータを蓄積していくとともに、地域の中心地であり続けたその歴史を解明するための分析、考察を重ねて行くことも重要であろう。

【参考文献】

千田嘉博 2004年「戦国期城下町構造と基層信仰—上井覺兼の宮崎城下町を事例に—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第112集 国立歴史民俗博物館

宮崎市教育委員会編 2020年『下北方5号地下式横穴墓』宮崎市文化財調査報告書第128集 宮崎市教育委員会

図版1



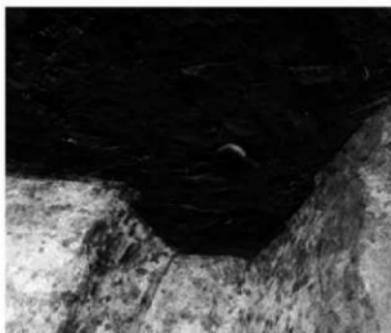
調査区全体

北側トレーンチ



南側調査区

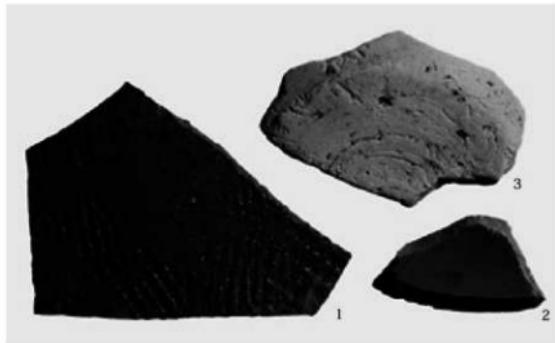




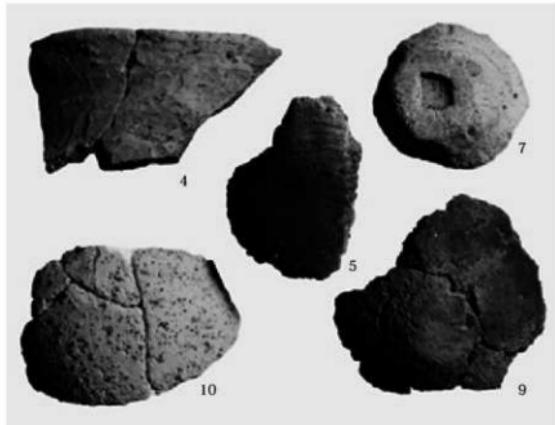
溝状造構 (SE1) 断面



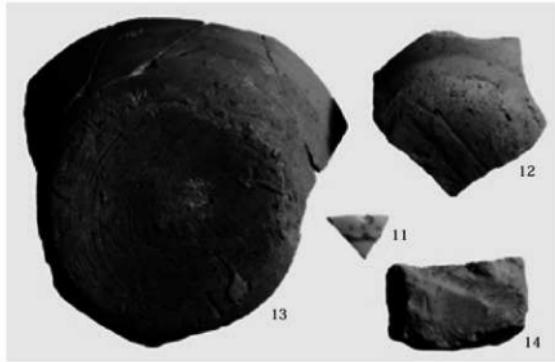
図版3



溝状遺構 (SE1) 出土遺物



その他の出土遺物①



その他の出土遺物②

第3部 下北方下郷第8遺跡

第Ⅰ章 調査に至る経緯と調査の経過

第1節 調査に至る経緯

平成27（2015）年9月25日、集合住宅の建築にともなって、宮崎市下北方町下郷5983-1、5984-1における埋蔵文化財の有無について照会がなされた。当地は周知の埋蔵文化財包蔵地である「下北方遺跡」の域内にあたるため、平成28年4月20日に事前の確認調査を実施した。その結果、開発計画地内に埋蔵文化財が確認された。

そのため、事業者との埋蔵文化財の取り扱いに関する協議をおこなった。その結果、開発計画地の一部について埋蔵文化財への影響を避けることができない部分があることから、当該部分において本発掘調査を実施することとなった。調査対象面積は約276m²で、現地での発掘調査は平成28年7月25日から同9月20日の期間実施した。なお、発掘調査にかかる文書手続は以下の通りである。

- 進文書 平成28年5月9日（宮教文第220号1）工事届（文化財保護法第93条）
- 伝文書 平成28年6月3日（宮教文第220号2）
- 着手報告 平成28年8月25日（宮教文第583号）
- 完了報告 平成28年10月4日（宮教文第583号1）
- 発見通知 平成28年9月26日（宮教文第583号2）
- 保管証 平成28年10月4日（宮教文第583号3）

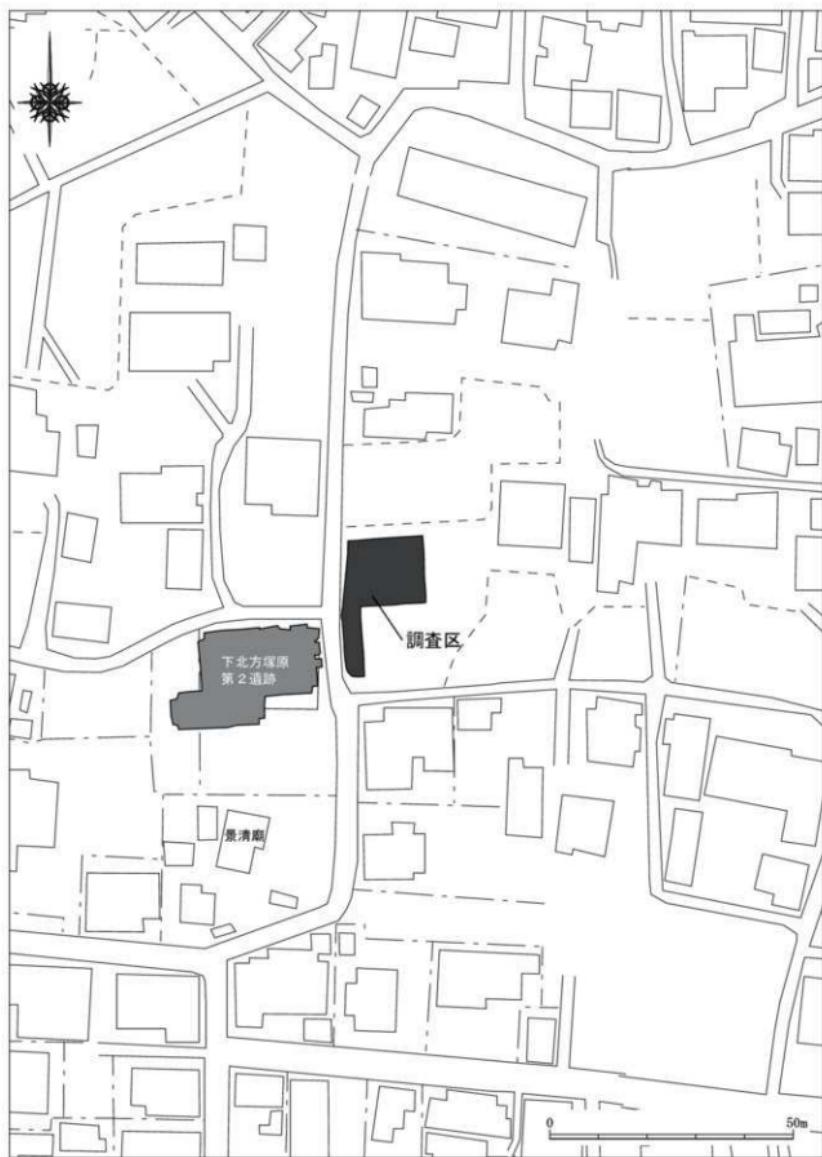
第2節 調査の経過

調査は、本発掘調査の対象となる部分に調査区を設定しておこなった。調査はまず、重機を用いた表土の掘削作業からおこなった。その後、発掘作業員によって人力で遺構検出作業をおこない、溝状遺構やピットなどの遺構が確認された。

確認された遺構は順次掘り下げ作業をおこない、掘り下げの進んだ遺構から記録作業を実施した。記録作業は、調査員の手測りによる実測作業に加え、35mmフィルムカメラ、中判フィルムカメラ、デジタルカメラを用いた写真撮影によった。あわせて、調査区の全景や周辺の地形を記録するため、空中写真撮影をおこなった。



発掘調査の状況



第1図 調査区位置図(S=1:1000)

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査地周辺の地形と成果の概要

調査地の地形

下北方下郷第8遺跡の所在する周辺は、第1章第2節で示したように南に向かって伸びる丘陵の南端付近にあり、周辺は標高20～30mでおおむね平坦な地形をなしている。細かくみれば、平坦地北辺は北側に接する標高約70mの越ヶ迫丘陵裾と接しており、標高が約30mである。ここから南が丘陵南端に向かって緩やかに下る平坦地形で、調査地はこの平坦地北辺に近い位置にある。

調査地は、発掘調査時点では畠地として利用されており、平坦な地形をなしていた。調査区内での自然堆積層検出面は北から南に向かってわずかに下傾しており、かつ調査区北側では自然堆積層の一部が削平されていた。このことから、調査区内の旧地形は調査時点よりも北側が高く南に向かって傾斜するような地形であったと判断できる。

成果の概要

調査区の平面形はおおよそ正方形に近い区画の南西隅に南北に長い長方形状の突出部が付いたような形態で（第2図）、その面積は約276m²である。

遺構は調査区全体で検出された。今回の調査で確認された遺構は、古代以降の溝状遺構7条、土坑15基があるほか、多数のピットがある。時期を明確にしうる遺物が出土したもののが少ないため、構築時期の不明確なものが大部分を占めている。ただし、今回調査で確認された時期の明らかな遺構の埋土との比較からは、ピットの多くは古代以降のものと考えられる。

また、調査区北端の一部をグリッド状に掘り下げた結果、旧石器時代の遺物が少量ではあるが出土している。

第2節 調査地の基本土層

今回調査地の基本土層は、以下の通りである（第3図）。

I層：暗褐色粘質土層（Hue10YR3/3）、締り弱い、粘性有。土器片、スコリア状粒子が混じる。
表土、旧耕作土層。

II層：暗褐色粘質土層（Hue10YR3/3）、I層と同質土。造成土層。

III層：黒色粘質土層（Hue10TR2/2）、いわゆる黒ボク土、締り弱い、粘性有。遺物包含層。
調査区北側では削平されている。

IV層：アカホヤ火山灰層（Hue10YR5/6）、調査区北側では削平されている。

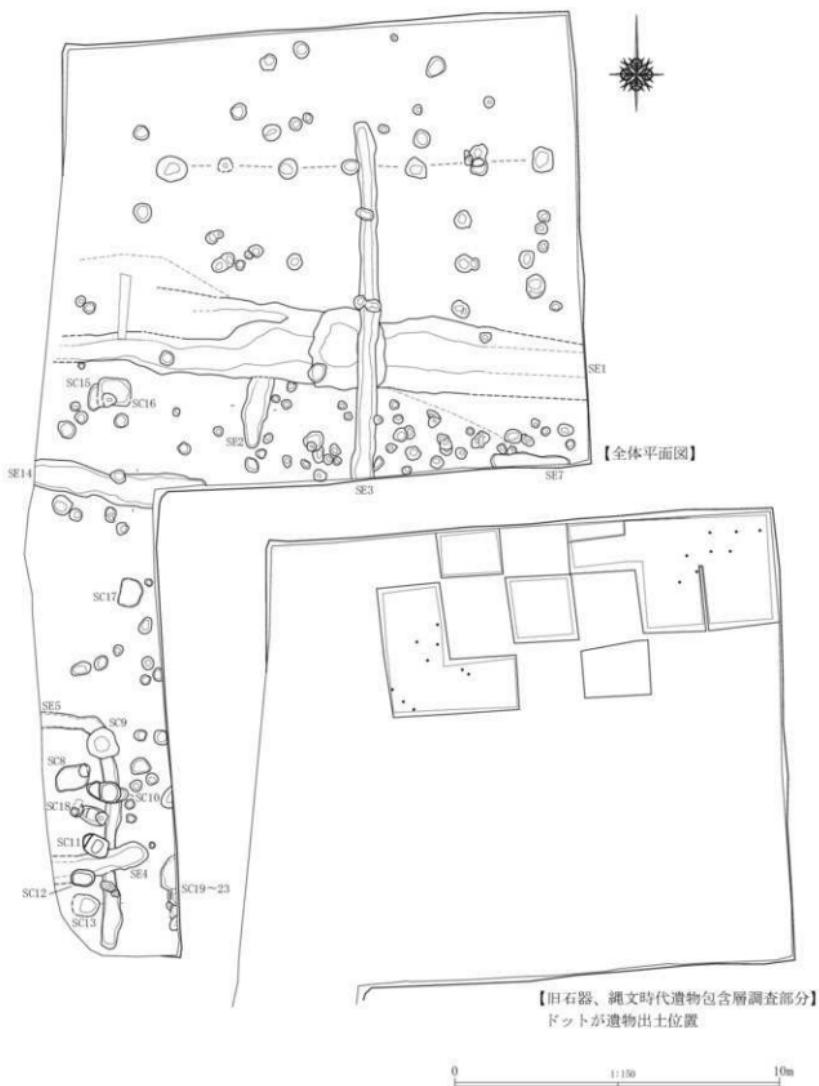
V層：牛の脛火山灰層（Hue7.5YR3/2）、調査区北側では削平されている。

VI層：黒色粘質土層（Hue10YR2/3）、白色微粒子が混じる。

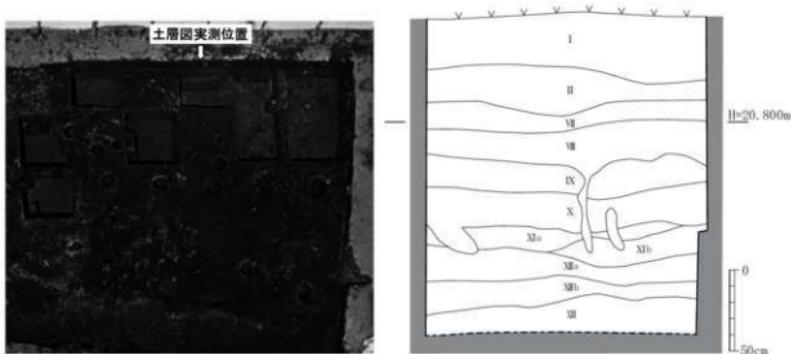
VII層：褐色粘質土層（Hue10YR4/4）、締まり有、粘性有。白ニガを含む。

VIII層：にぶい黄褐色粘質土層（Hue10YR5/4）、締り有、粘性有。白ニガを少量含む、遺物包含層。

IX層：黄褐色粘質土層（Hue10YR5/6）、硬く締まる、粘性有。小林降下軽石を含む。



第2図 調査区平面図(S=1:150)



第3図 調査区北壁土層図(S=1:30)

X層：褐色粘質土層 (Hue10YR7.5YR4/4)。硬く締まる、粘性有。白色火山灰微粒子含む。
遺物包含層。

XI a層：褐色粘質土層 (Hue10YR4/6)。硬く締まる、粘性有。AT層か。

XI b層：黄褐色粘質土層 (Hue10YR5/8)。硬く締まる、粘性有。AT層か。

XII a層：黄褐色粘質土層 (Hue10YR5/8)。硬く締まる、粘性有。シラス層。

XII b層：黄褐色粘質土層 (Hue10YR5/8)。硬く締まる、粘性有。シラス層だが色調が上層よりやや暗い。

XIII層：黄褐色粘質土層 (Hue10YR5/6)。硬く締まる、粘性有。シラス層と暗褐色粘質土が混じる層。

これらの各種土層の調査区内での堆積状況は一様ではない。調査区北側の約3分の1、すなわち第2図中に示した1点鎖線より北側では自然堆積層の一部が削平されており、造成土層(II層)直下で黒色粘質土層(VI層)あるいは褐色粘質土層(VII層)が検出された。これに対して調査区南側の約3分の2、すなわち第2図中に示した1点鎖線より南側では、表土層、造成土層下に黒ボク土層(III層)ないしアカホヤ火山灰層(IV層)が残存していた。

今回の調査における遺構検出は、土層の堆積状況が良好であった調査区南側ではアカホヤ火山灰層(IV層)上面で、一部土層が削平されていた調査区北側では黒色粘質土層(VI層)あるいは褐色粘質土層(VII層)上面でおこなった。

第3節 繩文時代早期、旧石器時代の遺物

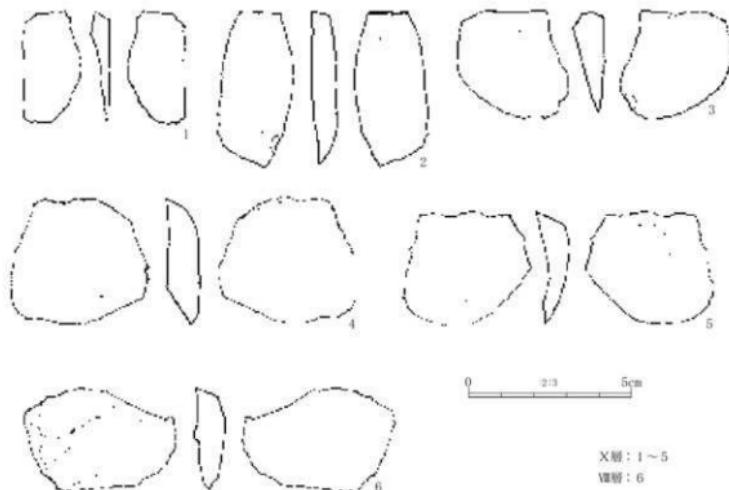
遺物の出土状況

表土、造成土下の遺構検出面での調査が進んだ段階で、それより下層の遺構と遺物を確認するために調査区北側にグリッドを設定して掘り下げをおこなった。その結果、Ⅷ層より縄文時代早期、Ⅹ層より旧石器時代の遺物が少量ではあるが確認された。

遺物は掘り下げ部分の北東部および南西部にややまとまる傾向を示しているものの、出土点数の少なさと散漫な分布状況からそれを、ブロックと積極的に認定できる状況とは言い難い。これらの出土遺物については接合作業をおこなったが、今回出土遺物の中で接合資料を確認することはできなかった。

遺物の概要

これらの遺物のうち、主要なものを第4図に示した。いずれも小型の剥片であり、二次加工などの痕跡も認められない。1、2は縦長の剥片で、流紋岩製である。1は、ネガ面、ポジ面ともに剥離方向が縦方向であり、石核からの同一方向への連続的な剥離がなされていたことがわかる。2も基本的に1と同様で、縦方向への連続的な剥離がなされている。3～6は横長の剥片で、頁岩製である。いずれも、複数方向からの剥離がなされていることが確認できることから、石核から剥片を作出するにあたっては複数方向からの剥離によってなされていたことがわかる。今回調査で確認された剥片については、流紋岩が縦方向への連続的な剥離により、頁岩が不定方向からの剥離により作出されており、石材と剥片作出にあたっての行為が対応している点に注目できる。



第4図 縄文時代早期、旧石器時代の遺物(S=2:3)

第4節 古代以降の遺構と遺物

確認された遺構

今回調査で確認された遺構の多くは古代以降に属するものである。溝状遺構7条、土坑15基のほか、多数のピットがある。

各遺構の分布状況は調査区のほぼ全体に散在するような状況であるが、溝状遺構1を境に南側に多く分布している。とくに、土坑は調査区南西隅付近に、ピットは溝状遺構1の南側に集中する状況が認められる。溝状遺構より北側はそれに比して遺構の分布が希薄で、南側から伸びている溝状遺構3を除いては、ピットのみが分布している。このことは、調査区北側の自然堆積層の一部が削平されていることによるものかとも思われるが判然としない。あるいは溝状遺構1が何らかの区画的な意味合いを有していた可能性も考慮される。

土坑

土坑の概要 15基確認された。調査区南西隅付近に集中する土坑群は、それぞれ何らかの関係性を有する可能性もあるが判然としない。溝状遺構4、5と、それと切り合っている土坑群との切り合い関係は、土坑群→溝状遺構5→溝状遺構4、土坑9である。

形態は平面形が円形、橢円形、隅丸長方形を基調とした不整形が多く、断面形は浅い皿状、U字形、箱形、逆台形のものがあり、一部段掘り状になっているものもある。埋土中からの遺物の出土量は概して少なく、小片が多い。

土坑8 調査区南西隅付近で検出した土坑で、土坑9の南西側、土坑10の北西側にある（第2、5図）。北東隅をピットにより切られている。平面形は東西方向に長い隅丸方形に近い形態であるが、全体にいびつでやや不整形である。底面は平坦で、側壁はおおよそ直線的に立ち上がっている。底面と側壁との傾斜変換は明瞭で、断面形は浅い皿状である。規模は、長さが103cm、幅が76cmで、検出面からの深さは9cmと浅い。アカホヤ火山灰層上面での検出であったため、本来はこれよりやや深い土坑であったといえる。

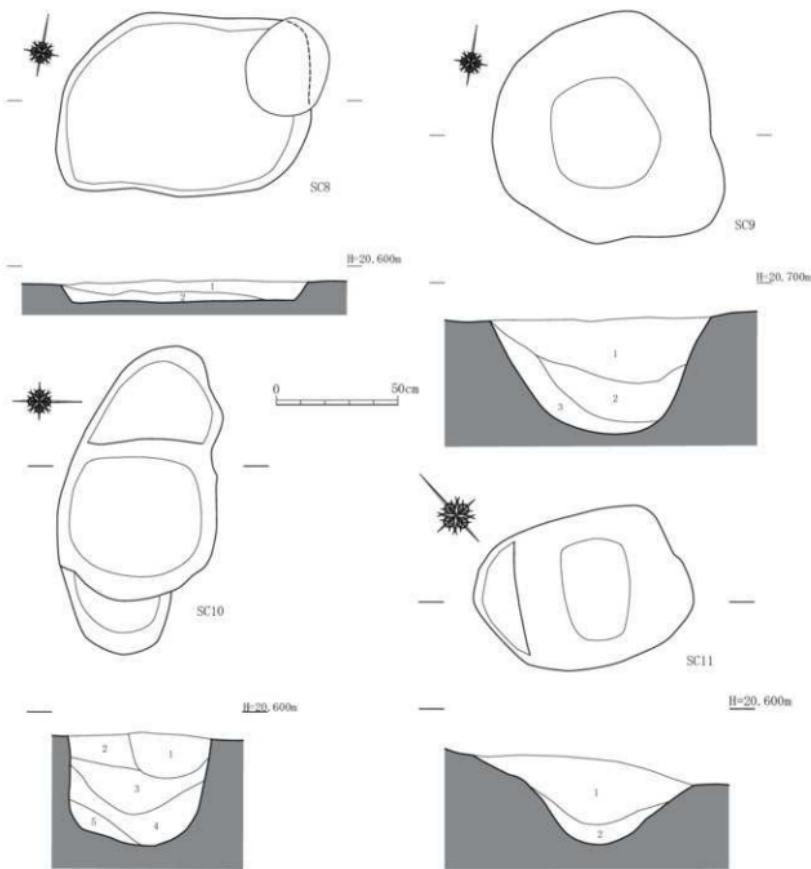
埋土は、上下2層に分層できた。下層が黒褐色土層、上層が暗褐色土層である。

遺物は埋土中より土器小片が出土した。時期的には古代に位置付けられるものであるが、小片であるため、具体的な年代は判然としない。

土坑9 調査区南西隅付近で検出した土坑で、土坑8の北東の位置にあり、溝状遺構5を切っている（第2、5図）。平面形は円形に近い形態であるが、不整形でとくに南東部分は一部が外方に張り出している。底面は緩やかに内湾している。側壁も緩やかに内湾しながら立ち上がり、第5図の断面図右側の側壁は上部がやや外方に屈曲している。底面と側壁は連続的に統いており、断面形はU字形である。規模は、直径がおおよそ90から95cmで、長さが最大となる張り出し部分を含めると約105cmである。検出面からの深さは48cmである。

埋土は3層に分層できた。土層断面の観察によれば、埋土は西側から流れ込んでいる様子を看取できる。いずれも黒褐色の土層である。

遺物は、埋土中より土器小片が出土した。時期的には古代に位置付けられるものであるが、



【土坑8】

- 1 暗褐色土、粘性低い、繊り弱い、赤色バニス、褐色粒子含む。
- 2 黒褐色土、粘性低い、繊り弱い、アカホヤ火山灰が混じる。

【土坑9】

- 1 黒褐色土 粘性低い、繊り弱い、褐色土まばらに混じる、白色粒子混じる。
- 2 黑褐色土 粘性低い、繊り弱い、褐色土ブロックが混じる、白色粒子少ない。
- 3 黑褐色土 粘性低い、繊り弱い、褐色土ブロックが混じる、白色粘土ブロックが混じる。

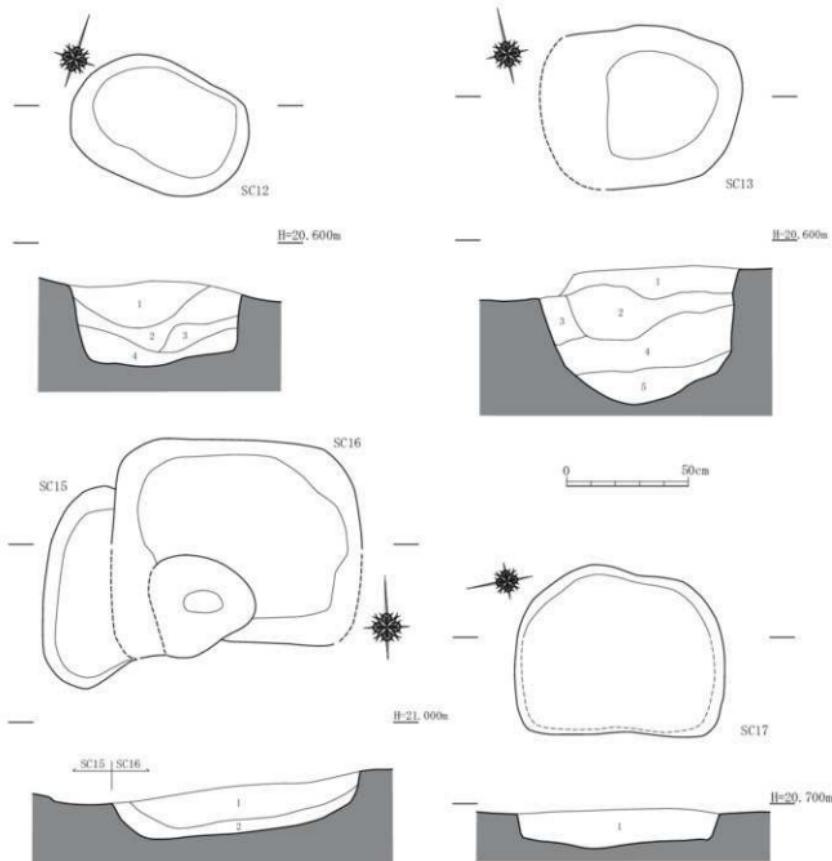
【土坑10】

- 1 喰褐色土 粘性有、繊り有、スコリア状粒子を含む。アカホヤ火山灰粒わずか含む。
- 2 喰褐色土 粘性有、繊り有、牛ノ麗ブロックを含む。アカホヤ火山灰粒を含む。
- 3 喰褐色土 粘性有、繊り有。アカホヤ火山灰ブロック、粒を多く含む。
- 4 喰褐色土 粘性有、繊り有、アカホヤ火山灰ブロック、粒を少量含む。
- 5 喰褐色土 粘性有、繊り有、アカホヤ火山灰粒はほとんど含まない。

【土坑11】

- 1 黑褐色土 粘性有、繊り有。アカホヤ火山灰ブロック含む。
- 2 黑褐色土 粘性有、繊り有。アカホヤ火山灰ブロック多く含む。

第5図 土坑8、9、10、11 実測図(S=1:20)



【土坑12】

- 1 黒褐色土 粘性有、繊り有、アカホヤ火山灰粒をごくわずか含む。
- 2 暗褐色土 粘性有、繊り有、アカホヤ火山灰ブロックを非常に多く含む。
- 3 暗褐色土 粘性有、繊り有、アカホヤ火山灰粒を含む。
- 4 暗褐色土 粘性有、繊り有、アカホヤ火山灰粒をわずか含む。

【土坑13】

- 1 黒褐色土 粘性有、繊り弱い、アカホヤ火山灰粒、ブロックをまばらに含む。
- 2 黒褐色土 粘性有、繊り弱い、アカホヤ火山灰粒、ブロックをまばらに含む。灰褐色粘土を含む。
- 3 黒褐色土 粘性有、繊り弱い、アカホヤ火山灰粒、ブロックを含む。
- 4 黒褐色土 粘性有、繊り弱い、アカホヤ火山灰粒、ブロックをまばらに含む。黒褐色ロームブロックを含む。
- 5 褐色土 粘性有、繊り有、褐色ローム土混じる、アカホヤ火山灰わずか含む、炭化物含む。

【土坑15】

- 1 暗褐色土 粘性有、繊り有、スコリア状粒子を非常に多く含む、アカホヤ火山灰ブロックを多く含む。
- 2 暗褐色土 粘性有、繊り有、スコリア状粒子を多く含む、アカホヤ火山灰ブロックを含む。

【土坑16】

- 1 黒褐色土 粘性有、繊り有、褐色土とアカホヤ火山灰ブロックを多く含む。

第6図 土坑 12、13、15、16、17 実測図(S=1:20)

小片であるため、具体的な年代は判然としない。

土坑10 調査区南西隅付近で検出した土坑で、土坑8の南東側、土坑18の北東側にある（第2、5図）。溝状遺構5に切られしており、かつ土坑東端部ではピットを切っている。平面形は東西方向に長い楕円形に近い形態であるが、全体にいびつで不整形である。二段掘り状になっており、西半が浅く、東半が深く掘り込まれている。底面は、深く掘り込まれた部分ではわずかに内湾し、西半の浅い部分ではおおよそ平坦である。深く掘り込まれた部分の側壁は直線的に上方へ立ち上がっている。底面と側壁の傾斜変換は比較的明瞭で、断面形はU字形である。規模は、長さが108cm、幅が66cmで、検出面からの深さは46cmである。

埋土は5層に分層できた。いずれも暗褐色の土層である。そのうちの1層とした土層は、断面をみると別遺構のような掘り込み状に見えるものの、平面での観察において別の遺構として認識はできなかった。

遺物は、埋土中より土器小片が出土した。時期的には古代に位置付けられるものであるが、小片であるため、具体的な年代は判然としない。

土坑11 調査区南西隅付近で検出した土坑で、土坑18の南側、土坑12の北側にある（第2、5図）。溝状遺構4、5に切られている。平面形は東西方向に長い楕円形状で、ややいびつで不整形である。底面は緩やかに内湾している。側壁はわずかに外湾しながら大きく開いている。西側の側壁は検出面に近い位置に明瞭な傾斜変換点があり、そこからさらに大きく外方へ開きテラス状の平坦面が形成されている。底面と側壁は連続的に続いている、断面形はおおよそU字形である。規模は、長さが88cm、幅が64cmで、検出面からの深さは36cmである。

埋土は上下2層に分層でき、下層ほどアカホヤ火山灰ブロックの含まれる量が多い。一時に堆積したような状況であり、人為的に埋め戻された可能性がある。

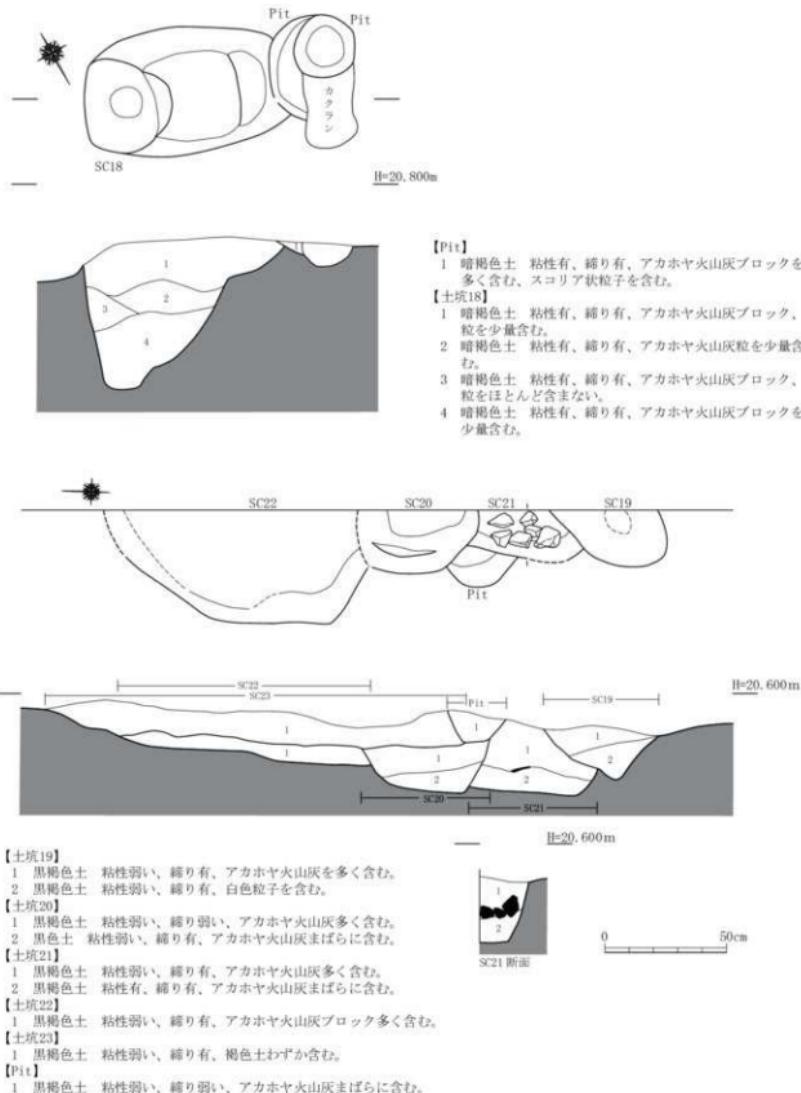
遺物は、埋土中に散在した状態で出土した。7は須恵器壺である。口縁部付近の小片で、直線的に外方に開いている。口唇部はつまみ出しによって、内面側、外面側に短く突出している。このほか土器小片が出土している。

土坑12 調査区南西隅付近で検出した土坑で、土坑11の南西側、土坑13の北側にある（第2、6図）。溝状遺構4に切られている。平面形は東西方向に長い楕円形である。底面はわずかに凹凸があるものの、おおよそ平坦である。側壁はほぼ直線的に上方へ立ち上がっている。底面と側壁との傾斜変換は比較的明瞭で、断面形は箱形である。規模は、長さが74cm、幅が50cmで、検出面からの深さが36cmである。

埋土は4層に分層できた。最上層のみ黒褐色土で、その他の層は暗褐色土である。いずれもアカホヤ火山灰の粒子が含まれている。

遺物は、埋土中より土器小片が出土した。時期的には古代に位置付けられるものであるが、小片であるため、具体的な年代は判然としない。

土坑13 調査区南西隅付近で検出した土坑で、土坑12の南側、調査区のほぼ南端部分にあ



第7図 土坑 18-19-20-21-22-23 塗測図(S=1:20)



第8図 土坑出土遺物実測図(S=1:3)

る（第2、6図）。東西方向に長い楕円形で、全体にいびつで不整形である。調査時に、西側の一部（第6図破線部分）を掘り過ぎてしまった。底面は緩やかに内湾しており、東側はわずかに段状になっている部分がある。側壁は西側では緩やかに内湾しながら外方へ立ち上がり、東側では数回屈曲しながらおおよそ直線的に上方へ立ち上がっている。底面と側壁との傾斜変換も西側と東側とで異なっており、西側は不明瞭で連続的であるのに比べると東側は明瞭である。断面形はおおよそU字形である。規模は長さ82cm、幅68cmで、検出面からの深さが58cmである。

埋土は5層に分層できた。おおむね水平に堆積する。最下層の5層中には炭化物が含まれていた。

遺物は、埋土中より土器小片が出土した。時期的には古代に位置付けられるものであるが、小片であるため、具体的な年代は判然としない。

土坑15 調査区中央西端付近で検出した土坑で溝状遺構1に近接した位置にある（第2、6図）。東側約2分の1を土坑16に切られている。平面形は南北方向に細長い楕円形である。底面はおおむね平坦である。側壁はわずかに残存するのみであるが、直線的に外方に向かって立ち上がっているようである。底面と側壁との傾斜変換は比較的明瞭で断面形は浅い皿状である。規模は現存部分で長さ84cm、幅26cmである。検出面からの深さは3cmほどであった。残存部分の形態からみて長さは本来の規模に近しいものと考えられる。

土坑15、16については、検出時に2つの遺構が切り合っていることが不明瞭であったことから、同時に掘削をおこなっている。この際に遺物が出土しているが、上記理由からそれらが2つの土坑のいずれに帰属するものであるかが明確でない。そこで、これら遺物については土坑15、16出土遺物として一括して報告する。

8は須恵器環である。体部から口縁部付近の小片で、直線的に外方に開く体部形態である。口縁端部は丸く收められている。9は土師器環である。底部の破片でやや厚みがある。底部外面にはヘラ切り痕跡がある。10は土師器環である。底部から体部下位にかけての破片である。底部外面はわずかに上げ底状になっており低い高台が付されたような形態である。底部内面は平坦で体部は外方に向かってわずかに内湾しながら広がっている。いずれも小片であるが、土師器の形態から9世紀末から10世紀前半頃にかけての資料であろうか。この2つの土坑からは、このほかに土器小片が出土している。

土坑16 調査区中央西端付近で検出した土坑で溝状遺構1に近接した位置にある（第2、

6図)。土坑15を切っており、南西隅付近をピットに切られている。平面形は東西方向に長い隅丸長方形である。調査時に南東、南西隅を掘り過ぎてしまっている(第6図破線部分)。底面はおおよそ平坦である。側壁は緩やかに内轉しながら立ち上がっている。底面と側壁との傾斜変換は比較的明瞭で、断面はU字形である。規模は長さ104cm、幅84cmで、検出面からの深さは28cmである。

埋土は2層に分層できた。いずれも暗褐色の土層で、上層の1層は今回調査で古代末の土師器が出土したピットと同質の土層であった。

出土した遺物は、上記のとおりである。

土坑17 調査区中央より南西側、溝状遺構5と溝状遺構14のちょうど中間付近にある(第2、6図)。遺構埋土と地山層が非常に似通っていたため、土坑西半の底面部分を掘り過ぎている(第6図破線部分)。平面形は南北方向に長い隅丸長方形で東辺はいびつな形状である。底面は中央付近がわずかに凹んでいるほかはおおよそ平坦である。側壁は直線的に外方へ立ち上がっている。底面と側壁との傾斜変換は明瞭で、断面形は箱形である。規模は長さ87cm、幅72cmで、検出面からの深さは17cmである。

埋土は1層のみで、アカホヤ火山灰粒子を含む黒褐色の土層である。

遺物は埋土中より土器小片が出土した。時期的には古代に位置付けられるものであるが、小片であるため、具体的な年代は判然としない。

土坑18 調査区南西隅付近で検出した土坑で、土坑8の南側、土坑11の北側にある(第2、7図)。北西端部をピットに切られている。平面形は北西-南東方向に長い隅丸長方形である。土坑南東隅はピット状に掘り込まれており、北西側は検出面からテラス状の平坦面が2段形成された後に底面に至っている。底面はおおよそ平坦である。側壁は南東側がほぼ直線的に上方に立ち上がり、北西側では緩やかに内轉し大きく外方に広がっている。規模は長さが推定で86cm、幅が52cmで、検出面からの深さは62cmである。

埋土は4層に分層できた。堆積の状況から人為的に埋め戻された可能性も考慮される。

遺物は、埋土中より土器小片が出土した。時期的には古代に位置付けられるものであるが、小片であるため、具体的な年代は判然としない。

土坑19 調査区南西隅付近の調査区東壁際で検出した土坑で、隣接する土坑21を切っている(第2、7図)。東側が調査区外に及んでいるため全体形を知れないものの、確認部分から平面形は楕円形に近いものであったと推測できる。底面は内轉して狭く、大きく外方へ開く側壁とは連続的に続いているため明確な面をなさない。断面形はV字形に近い。側壁は北側が一部段をなしながら内轉しており、南側は逆に外轉している。確認できた部分での規模は長さ45cm、幅23cmで、検出面からの深さは22cmである。

埋土は2層に分層できた。おおよそ水平に堆積している。

遺物は、埋土中より土器小片が出土した。時期的には古代に位置付けられるものであるが、小片であるため、具体的な年代は判然としない。また、土坑19～23一括資料の中に鉄滓小

片が含まれている。いずれの土坑に帰属するものは判然としない。

土坑 20 調査区南西隅付近の調査区東壁際で検出した土坑で、隣接する土坑 21、22 を切り、土坑 23 に切られている（第 2、7 図）。東側が調査区外に及んでいるため全体形を知れないものの、確認部分から平面形は不整円形に近いものであったと推測される。底面はおおよそ平坦である。側壁はわずかに内彎しながら上方に立ち上がっている。底面と側壁との傾斜変換は明瞭で、断面形は逆台形である。また、西側壁に一部テラス状の平坦面が形成されている。規模は、確認部分で長さ 50cm、幅が 27cm で、検出面からの深さは 21cm である。

埋土は上下 2 層に分層できた。おおよそ水平に堆積している。

遺物は、埋土中より土器小片が出土した。時期的には古代に位置付けられるものであるが、小片であるため、具体的な年代は判然としない。

土坑 21 調査区南端付近の調査区東壁際で検出した土坑である（第 2、7 図）。南北端を隣接する土坑 19、20 に切られており、東側は調査区外に及んでいる。そのため調査で確認できたのは遺構の一部であり全体形を知れない。確認できる部分から、平面形は不整円形あるいは不整楕円形であったものと想定されるが不明確である。底面はおおよそ平坦である。一部残存している側壁はわずかに内彎しながら広がっている。底面と側壁との傾斜変換は明瞭で、断面形は逆台形であったと考えられる。規模は確認できる部分で長さ 54cm、幅 22cm で、検出面からの深さは 33cm である。

埋土は上下 2 層に分層できた。おおよそ水平に堆積している。また、2 層の上面において凝灰岩の角礫が 6 点検出された。いずれも 2 層上面に接する状態であったことから、故意に配置された、あるいは、土坑を埋め戻す過程で投棄されたなど、何らかの人為的な原因によってその位置にあるものと思われるが、確認部分の状況のみでは明らかにできなかった。なお、これらの凝灰岩には被熱などの痕跡は認められなかった。

遺物は、埋土中より土器小片が出土した。時期的には古代に位置付けられるものであるが、小片であるため、具体的な年代は判然としない。

土坑 22 調査区南端隅付近の調査区東壁際で検出した土坑である。南端を土坑 20 に、上部を土坑 23 に切られており、東側は調査区外に及んでいるため全体形は明確でない（第 2、7 図）。確認できる部分から、平面形は不整円形あるいは不整楕円形であると推測でき、全体にいびつな形態である。底面はおおよそ平坦であるが、南北軸方向における中央付近で南側が一段階段状に下がっている。側壁は北側のみ確認でき、大きく外方に広がる形態である。底面と側壁とは連続的で断面形は浅い皿状にみえる。規模は確認できる部分で長さ 106cm、幅 49cm で、深さは 16cm である。

確認できた埋土は、アカホヤ火山灰ブロックを含む黒褐色土の 1 層のみである。

遺物は、埋土中より土器小片が出土した。時期的には古代に位置付けられるものであるが、小片であるため、具体的な年代は判然としない。

土坑 23 調査区南端付近の調査区東壁際で検出した土坑である。調査時には土坑 22 と同一遺構として掘削したものの、調査区壁での土層断面の観察により別遺構と判断された（第 2、7 図）。底面で土坑 20 および 22 を切っている。また、南端部分は調査区壁の土層観察で確認されたピットに切られている。平面形は、上記のように土坑 20、22 とともに掘削したため不明である。ただし、土坑 20 と 22 の西辺より外側に土坑 23 の西辺が認められないので、その範囲内に収まっていたものと判断できる。底面は確認できる部分ではわずかな凹凸があるものの、おおよそ平坦である。側壁は北側のみ確認できるが、階段状になる部分が認められ、全体としては大きく外方に開いている。底面と側壁の傾斜変換は比較的明瞭で、断面形は浅い皿状である。規模は土層断面の観察によると確認部分で南北方向に 172cm、深さ 21cm である。東西方向の規模は不明である。

埋土は 1 層のみで、地山の褐色土をわずかに含む黒褐色土である。

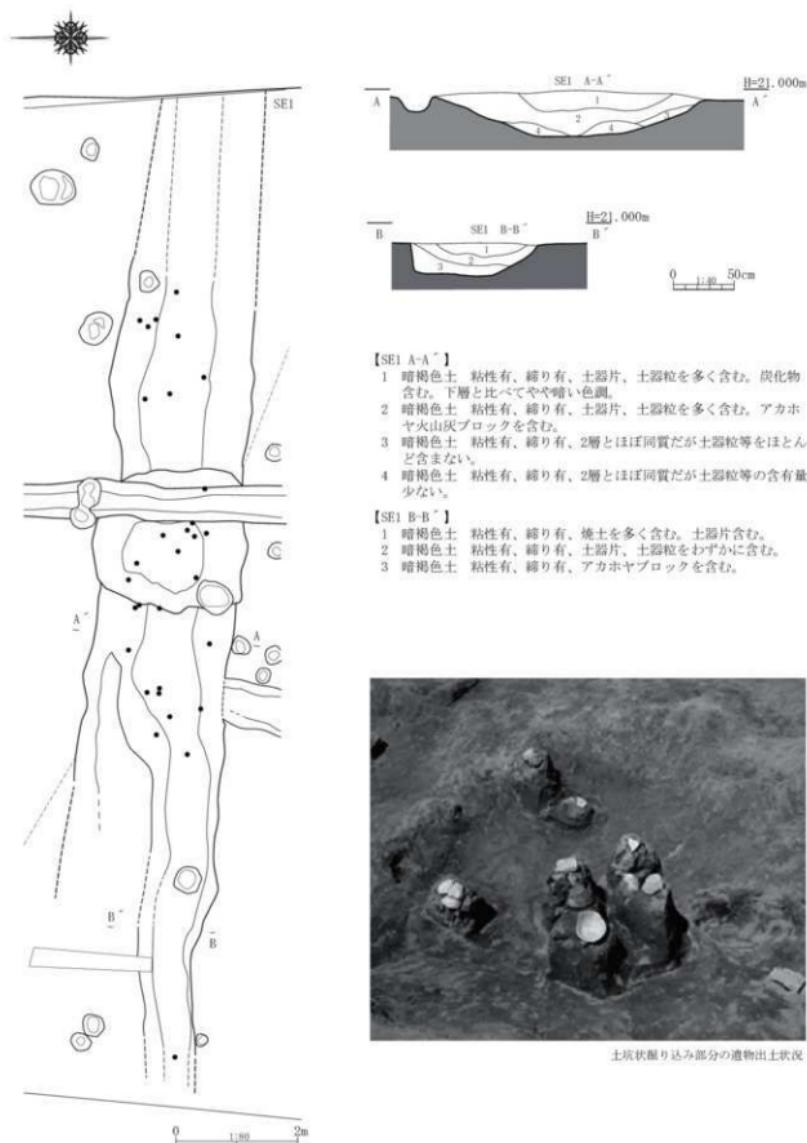
遺物は、埋土中より土器小片が出土した。時期的には古代に位置付けられるものであるが、小片であるため、具体的な年代は判然としない。

溝状遺構

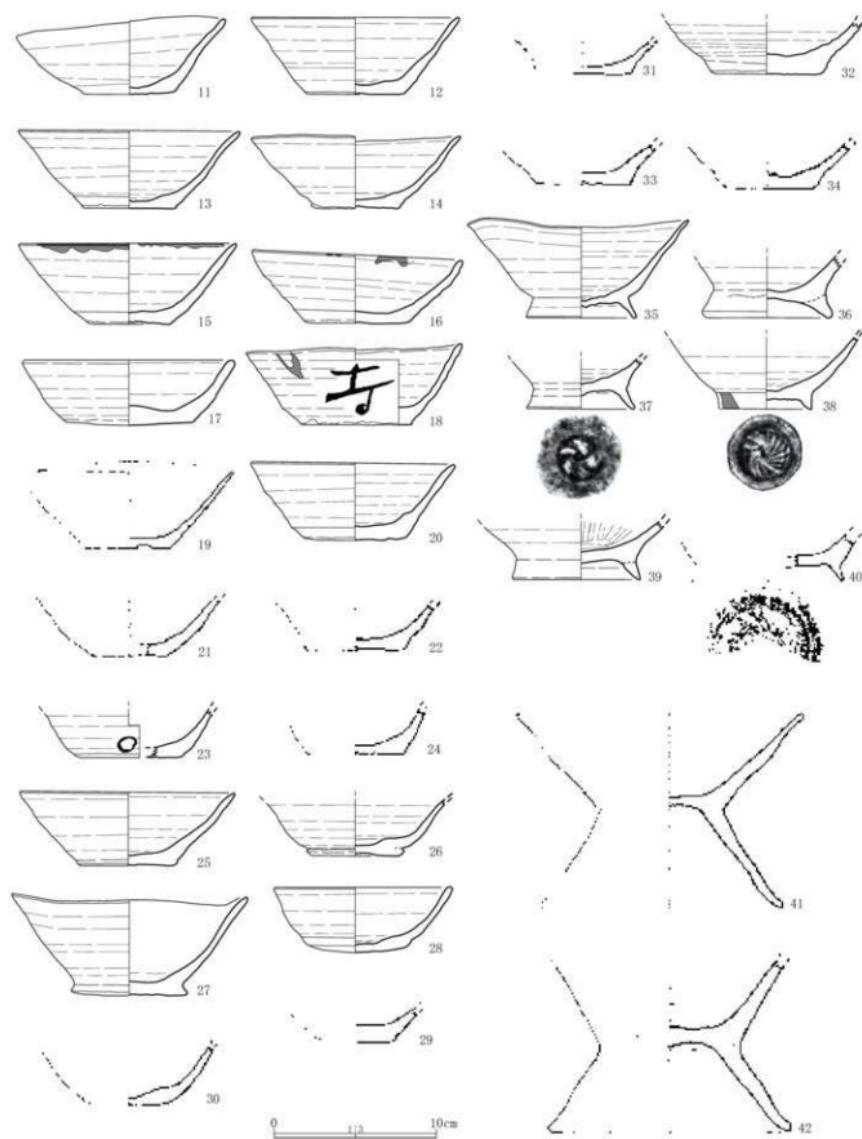
溝状遺構の概要 今回の調査では 7 条の溝状遺構が検出されたが、いずれの溝状遺構もその全体形を知ることはできなかった。とくに溝状遺構 7 は全体のごく一部が確認されたに過ぎなかった。そのため以下には詳述していない。これらは、おもに調査区南側に分布している。東西あるいは南北方向に伸びるものが多いが、幅や深さなど様々で、それぞれが関連性を持つとは考えにくく、各溝状遺構が独立して掘削、利用されていたものかと推測される。

溝状遺構 1 調査区中央付近を東西方向に伸びる溝状遺構である。一部を溝状遺構 3 に切られており、また溝状遺構 2 を切っている（第 2、9 図）。東西ともに調査区外に伸びているため、全長は知れない。溝底面の標高が東に向かって上がっていったために、調査区東壁より約 3.0 m 付近で溝状遺構が途切れていた。しかし、調査区東壁で遺構の断面を確認できたことから、本遺構の延長方向を把握することができた。また、同じく調査区の西側でも溝状遺構が一部途切れている。これは調査区西側は後世の造成などによる削平がやや深く及んでいたことによる。残存部分の形態は全体としておおよそ直線的に伸びる溝状遺構であるが、肩のラインは両辺とも直線的ではなく、いびつな形である。底面はおおよそ平坦である。側壁は遺構中央より東半はわずかな凹凸を有しながらも内巻しながら外方へ開く形態で、底面と側壁の傾斜変換は比較的明瞭で、断面形は椀状である（第 9 図 A-A'）。西半は北側壁にテラス上の平坦面が形成されている部分があり、その部分は断面形が階段状になっている。西端付近は遺構底面が消失しており明確でないが同じく北側にテラス上の平坦面が形成されていたのではないかと推測される。残存部分の断面形は逆台形状である（第 9 図 B-B'）。確認できる部分での幅は最大約 2.3 m で、検出面からの深さは約 35cm である。

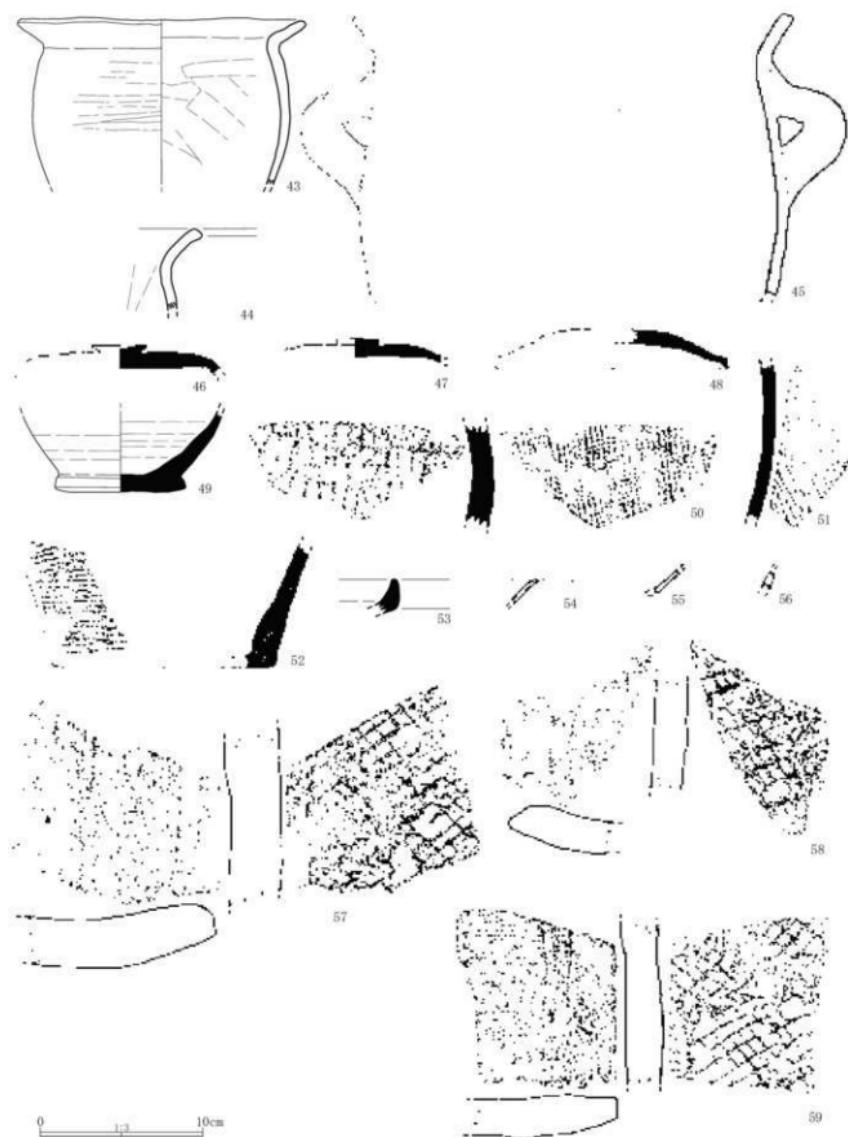
また、遺構の中央付近に土坑状の掘り込みが確認された。溝状遺構 1 と埋土が極めて類似していること、土坑状の掘り込み外縁が溝状遺構のいびつな肩ラインと近接した位置にあったことなどから検出段階では認識できていなかった。掘削が進んだ段階で認識できたもので、溝状



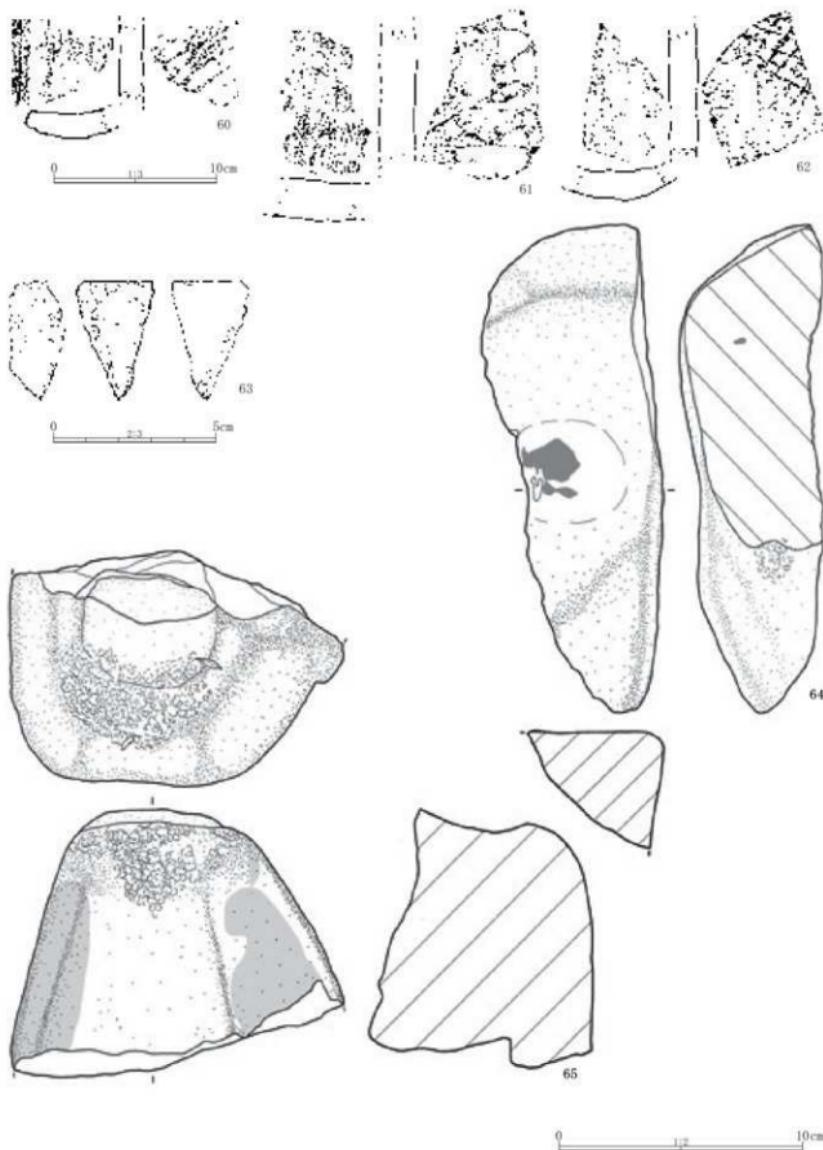
第9図 溝状遺構1実測図(S=1:80, 1:40)



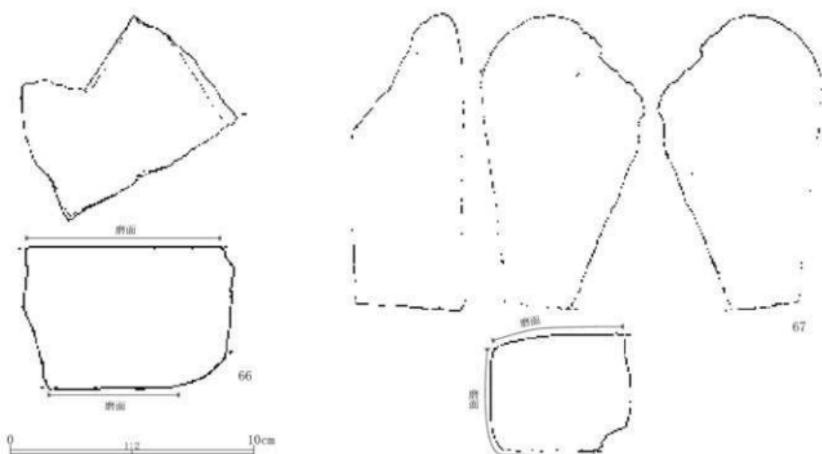
第10図 溝状遺構1出土遺物実測図① (S=1:3)



第11図 溝状遺構1出土遺物実測図② (S=1:3)



第12図 溝状遺構1出土遺物実測図③ (S=1:3, 2:3, 1:2)



第13図 溝状遺構1出土遺物実測図④ (S=1:2)

遺構1とは別の土坑であるとみられる。両者の切り合い関係は、残念ながら土層での検討をおこなえなかった。ただし、第9図にドットで示した点上げ遺物は、土坑部分で出土した遺物も溝状遺構底面付近で出土した遺物とほぼ同程度であること、さらにこれらの出土状況や帰属時期がほぼ同時期であった。このことから、土坑部分で出土した点上げ遺物が溝状遺構1にともなうものと推定されるため、両者の先後関係は土坑が先行するものと考えることが妥当と言える。この土坑は、平面形が不整円形で、断面形が椀状であり、その規模は長径約2.3から2.5m、検出面からの深さは約40cmである。

埋土は、中央付近で4層に、西端付近で3層に分層できた。いずれも土器粒を含んでおり、1層には炭化物も含まれていた。

溝状遺構1は今回調査でもっとも多くの遺物が出土した遺構である。第10～13図にその主要なものを図示した。点上げをおこなった一部の遺物はその平面的位置を第9図に示している。上記のとおり、溝状遺構1と土坑状の掘り込みが切り合っているため、一部両者の遺物が混在している可能性もあるが、出土状況からほとんどの遺物が溝状遺構1にともなうものと考えられる。

11～34は土師器坏である。規模は、口径が12.6～13.6cm、底径が5.3～6.5cm、器高が4.0～5.0cmの範囲に収まるものがほとんどであり、各規模の比率もおおむね似通った数値となることから、器形的に類似するもので占められているといえる。27は口径が14.6cmと大きく、器高も6.1cmと高いため他の個体よりも大型である。28は口径が11.0cmと小さいため、口径と底径との差が小さい。また、17は底径が8.0cmと大きく器壁の厚さも厚い。そのため全体形として他個体とやや異なる形態である。内面側の底面はおおむね平坦ないし緩やかに内彎しており、統く部体との境界は不明瞭で連続的に続いているものが多い。底部外面にはへ

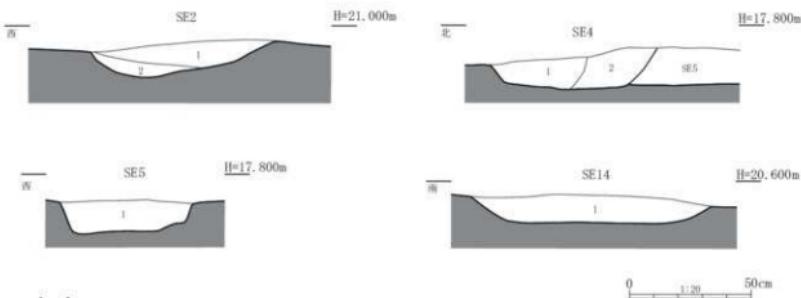
ラ切り痕跡があるが、26のようにヘラによる回転ナデ調整が施されているものがある。

11はほぼ完形である。底部内面は緩やかに内彎し連続的に体部へと続いている。体部はわずかに外反しながら開いている。両者の境界付近は器厚が増している。底部内面には仕上げナデが施されている。12は底部から口縁部にかけての破片で約2分の1が残存する。底部内面はわずかに内彎しており、底部と体部との境界は11より明瞭で、当該部分はやや器厚を増している。体部は直線的に外方に開いている。13は底部から口縁部にかけての破片である。底部内面は緩やかに内彎し連続的に体部へと続いている。体部は緩やかに内彎しながら外方に開き、口縁端部付近はわずかに外方に屈曲している。底部と体部の境界付近は器厚が増している。14は完形である。底部内面は緩やかに内彎し連続的に体部へと続いている。体部は緩やかに内彎しながら外方に開き、口縁部付近はわずかに外方に屈曲している。底部と体部の境界付近は器厚を増している。また、底部内面には仕上げナデが施されている。内面にススが付着しており、灯明皿の可能性がある。15はほぼ完形である。底部内面はおおむね平坦で緩やかに内彎しながら体部へと続いている。体部は直線的に外方へ開いており端部付近がわずかに外方へ屈曲している。ヘラ切り痕跡は底部外面のほか体部最下部にもある。口縁端部付近は内外面ともにススが付着しているため灯明皿として用いられていたと判断できる。16は全体の約4分の3が残存している。底部内面はおおむね平坦で、緩やかに内彎しながら体部へと続いている。体部は内彎しながら外方へ立ち上がっている。回転ナデによる器壁の凹凸が目立つ。また、ヘラ切り痕跡は底部外面のほか体部最下部にもある。口縁端部の一部に灯芯状にススが付着している箇所があり、灯明皿として用いられていたと判断できる。17は全体の約4分の3が残存している。他の個体に比して底径が大きい。底部は中央付近の厚みが増しているため、器厚は中心部が厚く体部側ほど薄い。底部内面はおおむね平坦である。体部はわずかに内彎しながら外方に開いている。18はほぼ完形である。底部内面はおおよそ平坦で体部へは緩やかに内彎しながら連続的に続いている。体部はわずかに内彎しながら外方へ立ち上がっている。回転ナデによる器壁の凹凸がやや目立つ。底部の厚みが体部に比べて厚い。体部外面には墨で文字が書かれており、「寺」と読める。文字の天地は器の天地に対して正位である。口縁端部の外面側にはススが付着しており、灯明皿として使用されていたと判断できる。19はほぼ完形である。器形がやや変形しているが、器表面に二次的な被熱痕跡があることから、この被熱により変形した可能性がある。底部内面はおおよそ平坦で体部へは緩やかに内彎しながら連続的に続いている。体部は直線的に外方へ開き、口縁端部は丸く収められている。器壁は薄い。底部外面および体部最下位にはヘラ切り痕跡がある。また、外面の底部付近に一部ススが付着している。20は全体の8割ほどが残存している。底部内面はおおむね平坦で緩やかに内彎しながら連続的に体部へ続いている。体部は直線的に外方へ開いている。口縁部付近はわずかに肥厚し端部は丸く収められている。底部と体部の境界は器厚が増している。回転ナデによる器壁の凹凸が目立つ。底部外面と体部最下位にはヘラ切り痕跡がある。21は底部から体部にかけての破片である。底部内面はおおむね平坦とみられ、緩やかに内彎しながら体部へ連続的に続いている。体部はわずかに内彎しながら外方へ開いている。底部外面にはヘラ切り痕跡がある。全体に風化気味である。底径が4.6cmで、今回調査で出土した土師器壺の中で小型である。22は底部から体部にかけての破片である。底部内面はおおむね平坦で緩やかに内彎しながら体部へ連続

的に続いている。底部と体部との境界は器厚を増している。底部外面にはヘラ切り痕跡がある。23は底部から体部にかけての破片である。底部は緩やかに内轉し、連続的に体部へと続いている。両者の境界付近は器厚を増している。体部はわずかに内轉しながら外方へ開いている。底部外面にはヘラ切り痕跡がある。外面の下位には墨で「○」と書かれている。また、内面には全体的にススや油煙が付着しており、本個体は灯明皿として使用されていたものと考えられる。24は底部から体部にかけての破片である。底部内面は緩やかに内轉しながら連続的に体部に続いている。底部と体部との境界付近は器厚を増している。体部の立ち上がりはやや急で、やや小ぶりな印象を受ける。底部外面にはヘラ切り痕跡がある。25は底部から口縁部にかけての破片である。底面は緩やかに内轉しており、体部へは連続的に続いている。体部はわずかに内轉しながら外方へ立ち上がり、口縁端部は丸く収められている。底部は円盤高台状であり体部との境界は器厚を増している。底部外面にはヘラ切り後に回転ナデによる仕上げがなされている。26は底部から体部にかけての破片である。底部内面は段状になっているが、成形時の回転ナデによるものである。体部は外方に向かって立ち上がり、上部はわずかに外方に屈曲する。底部円盤高台状でわずかに上げ底状になっており、外面はヘラによる回転ナデ調整が施されている。全体に被熱によって変色しており、外面は黒化、内面は赤化している。27はほぼ完形である。本遺構出土土師器坏の中では大型である。底部内面は緩やかに内轉し連続的に体部へと続いている。体部はわずかに内轉しながら外方へ開き、口縁部付近はわずかに外反している。口縁端部は丸く収められている。底部は円盤高台状で下端が突出しており、外面にはヘラ切り痕跡がある。器表面全体には回転ナデの痕跡があるが、内面は成形後に仕上げの回転ナデが施されている。そのため、内外面で回転ナデの凹凸が対応しない。また内底面にも仕上げナデが施されている。28は底部から口縁部にかけての破片である。底面は緩やかに内轉しており、連続的に体部へと続いている。体部は内轉しながら立ち上がる。口縁端部は丸く収められており、わずかに肥厚している。円盤高台状の底部で底部と体部との境界は器厚が増している。底部外面にはヘラ切り痕跡がある。内面には点々とススが付着している。29は底部から体部にかけての破片である。底部内面はおおむね平坦で体部へは緩やかに彎曲して続いている。体部は直線的に外方へ開く形態のようである。底部は円盤高台状になっており、外面にはヘラ切り痕跡がある。底径が5.0cmで今回調査出土土師器坏の中で小型である。30は底部から体部にかけての破片である。底部内面は緩やかに内轉しており、体部へは連続的に続いている。体部はわずかに内轉しながら外方へ立ち上がっている。底部と体部との境界付近は器厚が増している。底部外面にはヘラ切り痕跡があるが、ヘラ切り後にナデ調整が施されている。31は底部から体部にかけての破片である。底部内面は緩やかに内轉しており、体部へは緩やかに連続している。体部はわずかに内轉しながら外方へ開く形態のようである。底部と体部との境界付近は器厚を増している。底部外面と体部最下位にはヘラ切り痕跡がある。32は底部から体部にかけての破片である。底部内面は緩やかに内轉しており、体部へ連続的に続いている。体部は緩やかに内轉しながら外方へ開く形態とみられる。底部の器厚が厚い。底部外面にはヘラ切り痕跡がある。体部外面にみられる回転ナデの単位が非常に細かである。33は底部から体部にかけての破片である。底部内面はおおむね平坦でわずかに外反しながら外方へ開く体部へは連続的に続いている。底部外面にはヘラ切り痕跡があるが、ヘラ切り後にナデ調整が

施されている。また、内面は回転ナデの後に仕上げナデが施されている。また、内面にはススが広く付着している。34は底部から体部にかけての破片である。底部は全体的に厚く、凹凸があり中心部が厚い。また底部と体部との境界付近も器厚を増している。体部はそれに比べて薄く、直線的に外方へ開く形態のようである。底部外面にはヘラ切り痕跡がある。35～38は土師器高台付坏である。35は底部から口縁部にかけの破片である。全体に薄手のつくりで、焼けひずみによる変形がある。底部内面は緩やかに内彎しており、体部へ連続的に続いている。体部は直線的に外方へ開く形態で、口縁付近がわずかに外反し、端部は丸く収められている。底部外面にはヘラ切り痕跡がある。高台は長く外方へ「ハ」の字状に開き、端部はわずかに面をもつ。36は底部から体部にかけての破片である。底部内面はわずかに内彎し連続的に体部へと続いている。体部は直線的に外方へと開く形態とみられる。底部外面にはヘラ切り痕跡が認められる。高台は短く外方へ「ハ」の字状に開いており、端部は丸く収められている。37は底部から体部にかけての破片である。底部内面は緩やかに内彎しており、連続的に体部へと続いている。体部はわずかに内彎あるいは直線的に外方へ開く形態と考えられる。底部外面には放射状の調整痕がある。高台は長く外方へ「ハ」の字状に開き、端部は丸く収められている。38は底部から体部にかけての破片である。底部内面はわずかに内彎しており、連続的に体部へと続いている。底部と体部との境界は器厚を増している。体部はわずかに内彎しながら外方へ開いている。底部外面には放射状の調整痕がある。高台は短く直立しており、端部は丸くやや尖った形態である。内面には、灯芯状のスス付着箇所および輪状の変色部分が認められることから、本個体は灯明皿として用いられていたものと考えられる。39、40は黒色土器である。39は底部から体部にかけての破片である。内黒の黒色土器で、内面にはミガキ調整が施されており、その方向は底部付近が横方向、体部は縦方向である。器形は他の土師器坏と類似しており、底部内面は緩やかに内彎し、底部外面にはヘラ切り痕跡がある。高台はわずかに外方に開く形態で下端は尖っている。40は底部から体部にかけての破片である。内黒で、内面には縦方向のミガキ調整が施されている。39同様に器形は他の土師器坏と類似している。底部外面には放射状の調整痕がある。高台はわずかに外方に開く形態で下端は尖っている。器形や底部外面の放射状の調整痕の存在から在地産と考えられる。41、42は脚付坏である。いずれも土師器坏に非常に高い脚が付く。41は脚部から口縁部にかけての破片である。坏部底面はおおむね平坦で、体部は直線的に外方へ開いている。口縁端部は丸く収められている。体部と底部との境界付近は器厚をやや増している。脚部は非常に長く、直線的に外方へ大きく開く形態である。脚の裾付近は短く外方へ屈曲し、端部は丸く収められている。脚部全体が回転ナデによって整形されている。42は脚部から体部にかけての破片である。坏部は底面がおおむね平坦である。体部は直線的に外方へ立ち上がっており、その角度はやや急である。脚部は直線的に大きく外方へ開いている。脚の裾付近は短く外方へ屈曲し、端部は丸く収められている。脚部全体が回転ナデによって整形されているものの、内外面ともに粘土紐の接合痕跡が残る。また、坏部と脚部の境界付近外面に両者の接合時のものとみられる粘土のたるみが確認できる。観察の結果、坏部底面に脚部を接合し、その境界に粘土を貼り付けて整形したものと考えられる。43～45は甕である。43は小型の甕である。径は胴部より口縁部が大きく、胴部最大径は中位付近に位置している。口縁部は短く外反し端部は丸く収められている。胴部は丸みのある

る形態であり、外面には工具による横方向のナデ調整が、内面にはケズリ調整が施されている。口縁部は、内外面ともにヨコナデによる調整が施されている。全体に被熱しており、赤化、黒化の変色が顕著で、わずかに変形している。44は口縁部から胴部の小片である。口径は知れない。緩やかに外反する口縁部形態で端部には面が作り出されている。胴部は外面にはナデ調整、内面には斜め方向のケズリ調整が施されている。口縁部外面にはわずかにスグが付着している。45は大型の甕で、胴部には把手が取り付けられている。胴部径より口縁部径が大きい。胴部の最大径は中位より下にあり、やや下膨れの胴部形態になる。口縁部は短く外反し、端部はナデ調整によって面が作り出されている。胴部は、外面には工具による横方向のナデ調整が、内面には縦方向、斜め方向のケズリ調整が施されている。口縁部付近は内外面ともに横方向のナデ調整が施されている。把手はU字形にした太い粘土紐が胴部上位に貼り付けられており、全面が指ナデで整形されている。46から48は須恵器壺蓋である。46は天井部付近の破片でわずかに体部が残存している。天井部は扁平で、回転ヘラケズリが施されている。ボタン状のつまみがあり、中央部は窪んでいる。内面は回転ナデの後、仕上げナデが施されている。47も天井部付近の破片である。天井部は扁平で回転ヘラケズリが施されている。ボタン状のつまみがあり、中央部はわずかに突出している。内面は回転ナデの後、仕上げナデが施されている。天井部内面は非常に平滑でにぶい光沢があるため、転用硯として用いられた可能性がある。48は天井部から口縁部にかけての破片で全体の約6分の1が残存している。天井部はわずかにふくらみをもち、回転ヘラケズリが施されている。中央部にはわずかにつまみの立ち上がり部が残存している。口縁部は端部が短く折り返されている。49は須恵器壺である。底部が厚く円盤高台状で下端部がわずかに突出している。底部内面は緩やかに内彎しており、連続的に体部へと続いている。体部は内彎しながら外方へ開いている。底部外面および体部最下位はヘラ切り痕跡がある。50、51は須恵器甕である。いずれも胴部中位付近の破片とみられる。50の外面には格子目タタキ痕跡、内面には当具痕跡が、51の外面には平行タタキ痕跡がある。51の内面では当具痕跡がナデ消されている。52は須恵器で底部から体部にかけての破片である。小片で明確でないが、器種は鉢あるいは壺とみられる。底部は平坦で、体部は外方に向かって直線的に開く形態である。底面は粗いナデで整形されており、一部に纖維状圧痕がある。体部の外面には格子目タタキ痕跡があり、内面は回転ナデが施されている。53は須恵器鉢である。口縁端部付近の破片で、短く内側に屈曲し端部は丸く收められている。54から56は縫紉陶器である。いずれも小片であり器形を知れる個体はない。また、3点とも両面に施釉されている。54、55は器壁の厚さから同一個体の可能性もあるが不明である。57から62は平瓦である。57から60は側縁の一部が残存している。いずれも、側縁端面にタテケズリ調整が施されており、57、60は凹凸両面の側縁際、58、59は凹面の側縁際にもタテケズリ調整が施されている。61、62は全周が欠損している。凹面にはすべての個体に纖維痕跡がある。57、58、59、60、62の凸面には格子目タタキ痕跡があり、57、58、59は一部にナデ痕跡も確認できる。61の凸面は磨滅により不明瞭であるがナデ痕跡が確認できる。いずれの個体も、凹面の纖維痕跡やわずかな凹凸の存在などから桶巻き作り〔佐原1972〕によって製作されたものと判断できる。63から67は石器である。63は三角錐状の形態で、側縁部に微細な剥離がある。玉髓製とみられ、火打石と考えられる。64は台石である。全体に赤化しており、図中中央付近は磨面で



【SE2】

- 1 黒褐色土 粘性有、繊り有、橙色粒子を多く含む。土器片含む。
- 2 黒褐色土 粘性有、繊り有、アカホヤ火山灰、黒ニガブロックを含む。

【SE4】

- 1 黒褐色土 粘性有、繊り有、アカホヤ火山灰ブロック、土器片を含む。
- 2 黒褐色土 粘性有、繊り有、アカホヤ火山灰粒、土器片を含む。

【SE5】

- 1 黒褐色土 粘性有、繊り有、アカホヤ火山灰ブロック。粒を含む。

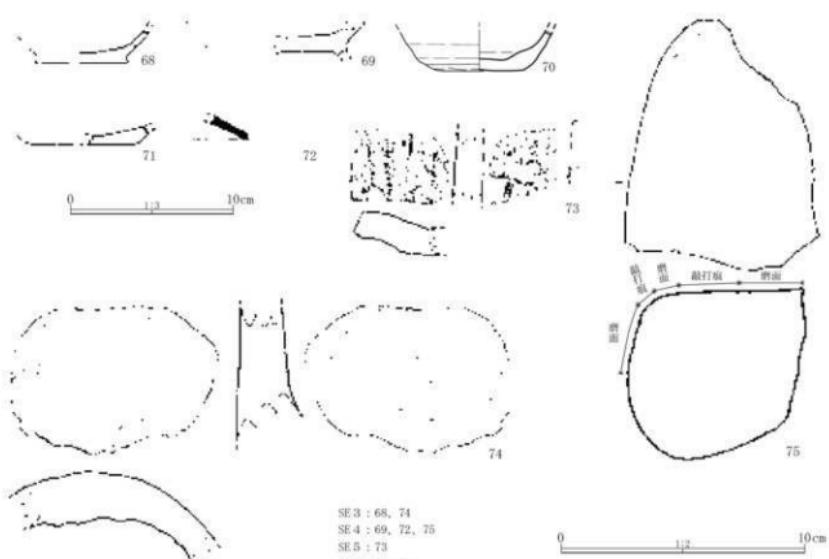
【SE14】

- 1 暗褐色土 粘性有、繊り有、アカホヤ火山灰粒含む。土器片多く含む。

第14図 溝状遺構2,4,5,14断面図(S=1:20)

わずかに窪んでおり、鉄錆が付着している箇所がある（図版12）。右側面には敲打痕跡があり、欠損部分により一部切られている。ただし、欠損部分も被熱によって変色していることから、当該部分欠損の後も本個体は台石として使用されていたものと判断できる。被熱や鉄錆が付着している状況から鍛冶にともなって使用されたものであると考えられる。65は台石である。図上、上面側に敲打痕跡が顕著である。また、上面は大きく窪んでいる。全体に被熱により変色しており、側辺はススのようなものが付着している。鍛冶具の可能性がある。66は砥石である。上下面以外は欠損している。上下面とも磨面として使用されており平滑である。両面ともわずかに敲打痕跡があることから台石としても用いられていた可能性がある。観察から、研磨の後に敲打がおこなわれていたことがわかる。67も砥石である。図上、右側辺側と下面の一部を欠損している。全体に平滑で磨面が顕著であり、各所に敲打痕も認められるほか、全体が被熱により赤く変色している。鍛冶具の可能性がある。また、本遺構からは鉄滓の小片が出土した。

溝状遺構2 調査区中央付近で検出した溝状遺構である（第2、14図）。南北方向に伸びる溝状遺構であるが、溝状遺構1に切られており、かつ北側は造成により削平されたためか調査区内にその延長を確認することができなかった。全体として直線的な溝状遺構であるが、肩のラインはいびつな形態である。底面は緩やかに内傾しておりわずかな凹凸も認められる。側壁は西側では内傾、東側では外傾しながら外方に開いている。底面と側壁との傾斜変換は不明瞭で連続的に続いており、断面形は浅い椀状である。確認部分での長さは約2.1m、幅は約75cmで、検出面からの深さは約15cmである。埋土は2層に分層できた。



第15図 溝状遺構出土遺物実測図(S=1:3、1:2)

遺物は、埋土中より土器小片が少量出土したのみである。時期的には古代に位置付けられるものであるが、小片であるため、具体的な年代は判然としない。

溝状遺構3 調査区中央付近で検出した溝状遺構である（第2図）。南北方向に伸びる溝状遺構で、溝状遺構Iを切っている。北側は調査区内で途切れているが、周辺は造成により一部土層が削平されている箇所であり、遺構が構築当初からこの位置で途切れていか否かについては明らかでない。南側は調査区外におよんでいるため、本遺構の全長は知れない。全体として直線的な溝状遺構であるが、肩のラインはいびつな形態である。断面形はU字形である。確認部分での長さは約10.9mで、幅は約0.6mと狭く、検出面からの深さは20cmである。

68は土師器環である。底部から体部にかけての破片である。わずかに内彎する底部から連続して体部へ続く形態である。底部は円盤高台状で下端部がわずかに突出している。74は丸瓦である。外面には瓦長軸と並行方向のナデ痕跡が、内面には不定方向のナデ痕跡が明瞭に認められる。内面は図中の下部側が緩やかに彎曲しながら厚みを増していることから軒丸瓦である可能性があるが明確でない。本遺構からはこのほかに、古代の土器小片、須恵器片、瓦片に加え近世の遺物が出土しているため、本遺構は近世に位置付けられる。

溝状遺構4 調査区南西隅付近で検出した溝状遺構である（第2、14図）。東西方向に伸びている。東端は調査区内にあるものの、西側は調査区外に及んでいるため全長は知れない。底

面はおおよそ平坦である。側壁はわずかに内彎しながら外方に開いている。底面と側壁との傾斜変換は明瞭で、断面形は逆台形状である。確認部分での長さは約2.8m、幅は約0.75mで、検出面からの深さは20cmである。埋土は2層に分層できた。

遺物は埋土中より点的に出土している。69は土師器高台付壺の底部付近の破片である。底部内面はおおむね平坦である。底部外面にはヘラ切り痕跡が認められる。高台はわずかに残存しており、短く外方に開く形態とみられる。72は須恵器壺蓋口縁部付近の小片である。口縁端部は短く下方に屈曲する形態である。内面にはわずかに黒色の付着物がある。スヌなのが墨なのか判然としない。75は図中での左側辺を除く周囲を欠損している。砂岩製である。図での上面および上面と左側面との境界付近には敲打痕跡が認められる。また、上面、左側面には磨面がある。したがって、本資料は敲石、磨石として使用されたことがわかる。本遺構からはこのほかに古代の土師器片、須恵器片、瓦片が出土している。

溝状遺構5 調査区南西隅付近で検出した溝状遺構である（第2、14図）。調査区内で「L」字形になる溝状遺構で、南端部は調査区内で取まっている。そこから北へ約6.7mあたりで西方向に向けてほぼ直角に屈曲して伸び調査区外にまで及んでいる。したがって、その全体形は知れない。底面はわずかに段状になっているが、おおむね平坦である。側壁は直線的に外方へ開いている。底面と側壁との傾斜変換は明瞭で、断面形は逆台形状である。確認部分での規模は、長さ約7.9m、幅約0.45mで、検出面からの深さは約15cmである。

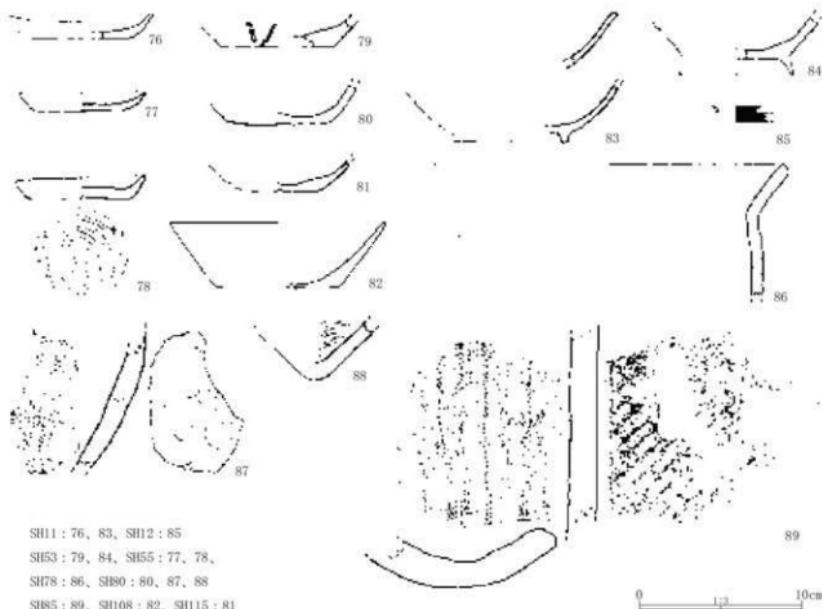
遺物は埋土中より点的に出土した。73は平瓦の小片である。側縁の一部が残存しており、側縁および凹凸両面の側縁際にはタテケズリ調整が施されている。凹面はナデ調整痕跡が、凸面には格子目タタキ痕跡がある。本遺構からは、このほかに土師器片、瓦片が出土している。

溝状遺構14 調査区中央西端付近で検出した溝状遺構である（第2、14図）。東西方向に伸びる溝状遺構で、溝状遺構1とおおよそ並行している。両端がそれぞれ調査区外に及んでおり、その全長は知らない。底面はおおよそ平坦である。側壁はわずかに内彎しながら外方へ開いており、断面形は逆台形状である。確認部分での長さは約5.0m、幅は約0.95mで、検出面からの深さは10cmである。

遺物は埋土中より点的に出土した。70、71は土師器壺である。70は底部から体部にかけての破片である。おおむね底部はおおむね平坦で、体部は緩やかに内彎しながら外方へ開く形態である。底部と体部との境界付近は、器厚を増している。底部外面、体部最下位にはヘラ切り痕跡がある。内面には全体的にスヌが厚く付着している（図版14）。71は底部の破片である。底面は平坦で底部との境界付近は緩やかに彎曲しながら体部へと続いている。底部外面にはヘラ切り痕跡がある。本遺構からは、このほか土師器片、須恵器片、瓦片が出土している。

ピット

ピットの概要 今回調査では多数のピットが検出されている。本章第1節で示したとおり、時期を明確にしうるものは少ないが、埋土などの特徴からおおむね古代以降に位置付けられるものと考えられる。出土遺物から時期が判断できるものは、完形に近い土師器が出土した



第16図 ピット出土遺物実測図(S=1:3)

SH55 のみで 12 ~ 13 世紀ころに位置付けられようか。

また、今回調査では、列状に並ぶピットも確認された。調査区北側に東西方に並ぶ 7 基のピットがそれであり、第2図で破線により示した。規模の大小はあるものおおむね直線的に並んでおり、埋土もほぼ同質のものであったことから 1 つの遺構とみなしうる可能性が高い。埋土の特徴から近世以降のものと考えられる。

ピット出土遺物 今回調査で多数確認されたピットから出土した主要な遺物を図示したのが第16図である。

76 ~ 78 は土師器皿である。いずれも小型で器高が低く扁平な器形で、平坦な底部から体部が短く外方に立ち上がる形態である。口縁端部は丸く收められている。底部外面には 76, 77 ではヘラ切り痕跡が、78 では糸切痕跡がある。底部形態は、76, 77 がわずかに突出し、78 は平坦であることから、前 2 者が堀田による分類 [堀田 2012] の土師器小皿 A 2 類に、78 が土師器小皿 A 1 類に該当する。79 ~ 82 は土師器壊である。いずれも底部外面にヘラ切り痕跡がある。79 は底部から体部にかけての小片である。底部は緩やかに体部へと続いており、両者の境界付近は器厚を増している。底部外面にはヘラ切り痕跡がある。体部外面には墨書きがある。欠損などにより判別できないが、現存部分は平仮名の「ひ」に近い形態である。80 は

底部から体部にかけての破片である。底部は緩やかに内彎し連続的に体部へと続いている。体部はわずかに内彎しながら立ち上がっている。81は底部から体部にかけての破片である。底面は緩やかに内彎し器厚を増した境界部を経て体部へと続いている。体部はわずかに内彎しながら外方へ開いている。82は口縁部から底部にかけての破片である。底部内面から口縁部までは緩やかに内彎しながら続いており、底部と体部との境界付近は器厚を増している。体部は直線的に外方へ開き、口縁端部は丸く收められている。これらは形態的特徴から、82が8世紀末から9世紀前葉（堀田編年第Ⅰ期）、79、80が9世紀中葉から後葉（同第Ⅱ期）、81が10世紀中葉から後葉（第Ⅳ期）に位置付けられよう。83は内黒の黒色土器碗である。底部から口縁部にかけての破片である。図示した底部片と口縁部片は接合しないが同一個体である。やや浅く全体に丸みのある器形である。口縁部は短く外方に屈曲し、端部は丸く收められている。高台は短く、断面形は四角形で下端面はナデ調整により平坦に整形されている。内面にのみ不定方向のミガキ調整が施されており、外面は回転ナデ調整で仕上げられている。84は高台付坏である。底部から体部にかけての破片で、高台はやや高く端部は丸く收められている。底部から体部にかけては緩やかに内彎しながら続いており、両者の境界は器厚を増している。9世紀末から10世紀後葉（堀田編年第Ⅲ～Ⅳ期）に位置付けられよう。85は須恵器坏蓋である。天井部の小片でツマミ部が残存する。天井部は平坦で、ツマミは平たいボタン形である。86は土師器甕である。口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部は「く」の字形に屈曲している。胴部はあまり膨らまない。二次的な被熱を受けており、外面には煤が付着し、内面は赤化している。ヘラケズリが頸部まで及んでいる。8世紀末から9世紀前葉（堀田編年第Ⅰ期）に位置付けられよう。87、88は焼塩土器である。2点は明確ではないが同一個体と考えられる。外面には成形時の指頭圧痕が、内面には纖維痕跡が認められる。89は平瓦である。側縁の一部が残存している。側縁端面および凹面の側縁際にはタテケズリ調整が施されている。凹面には纖維圧痕が、凸面には摩滅が著しいものの格子目タタキの後ナデ消されている様子が認められる。その他の遺構出土の瓦同様、桶巻き作り〔佐原前掲同〕と判断できる。

第5節 遺構外出土遺物

遺構外出土遺物 今回調査では、遺構外から多くの遺物が出土した。そのうちの主要なものを第17、18図に図示した。

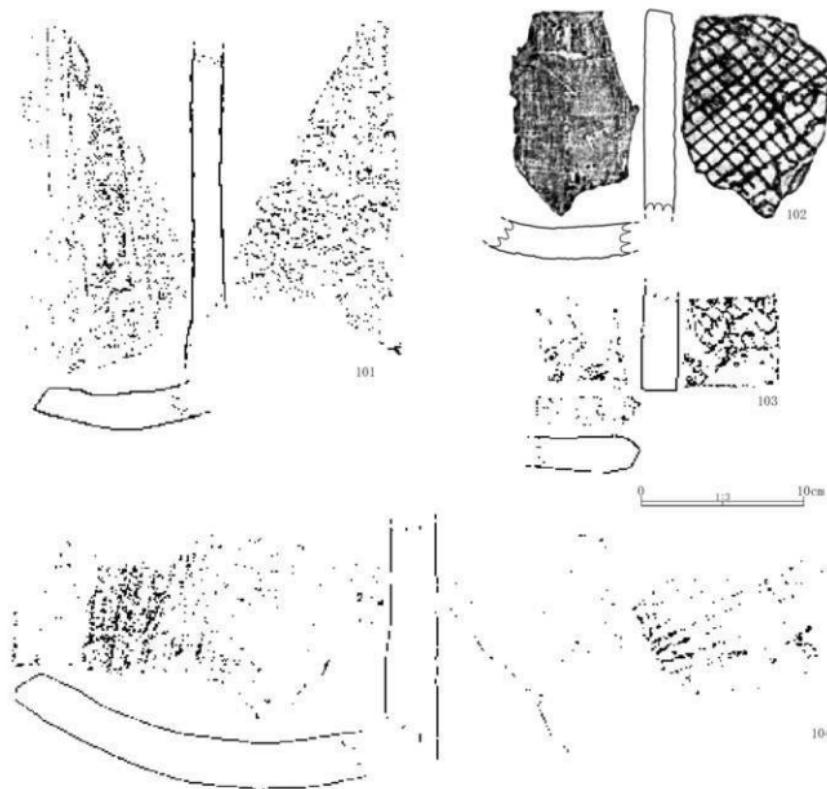
90は不明土製品である。平面形は二等辺三角形状で、底角の一部を欠損している。全面に整形時の製作痕跡とみられる擦痕が認められる。胎土が古代瓦に近く、古代瓦片を転用して製作されたものの可能性もあるが、不明である。91は土師器坏である。底部の小片である。底部外面にはヘラ切り痕跡と墨書が認められる。墨書は、欠損しているため判読が難しいが、「寺」、「寸」の可能性もある。92～94は須恵器坏である。92は口縁部から体部にかけての破片である。わずかに内彎しながら外方に立ち上がり、口縁部付近はわずかに外反している。93、94は高台付坏である。93は底部から体部が内彎しながら連続的に続く器形である。高台は短く外方に開いており、全体が回転ナデで成形された後に下端面が平坦に仕上げられている。94はほぼ平坦な底面から外方に開く形態の体部が続いている。高台は短く外反し、下端部は丸く仕上げられている。95は須恵器壺で、胴部上位から頸部下端付近の破片である。最



第17図 遺構外出土遺物実測図① (S=1:3)

大径を肩部と胴部の境界付近にもつ長胴壺と考えられ、宮崎市佐土原町下村窯跡資料に類似する。内面には頸部の接合にともなう粘土のたるみがみられる。内面の頸部付近と胴部外面の一部には自然釉がわずかに付着している。98、99は須恵器甕である。いずれも胴部片で、外面には格子目タタキの、内面には当具の痕跡が認められる。98の外面には一部に赤色顔料が、99の内面には一部にスカ墨らしき黒色の付着物が確認できる。100は須恵器甕の胴部片と思われるが器壁が薄い。また赤色顔料がわずかに付着している。96、97は東播系須恵器の鉢である。いずれも外方に直線的に立ち上がる形態である。口縁部は96がわずかに外方に屈曲し端部は上方に拡張される形態、97はわずかに肥厚し端部は丸く收められる形態となっている。98、99は須恵器甕の胴部片で外面には格子目タタキ痕跡が認められる。99は内面に赤色顔料が付着している。100も須恵器甕胴部片と考えられ、内面及び破断面に赤色顔料が付着している。101～104はいずれも平瓦である。101、104は側縁の一部が、102は端辺の一部が、103は側縁と端辺の一部が残存している。側縁が残存するものはいずれも端面にタテケズリ調整が施されている。102、103は凹面凸面両面の側縁際に、101は凹面の側縁際にもタテケズリ調整が施されている。また102の端辺にはケズリ調整、103の端辺にはナデ調整が施されている。凹面には、101、102、104では繊維圧痕が残っており、103はナデ消されている。凸面にはいずれも格子目タタキ痕跡があり、101、104はタタキの後一部がナデ消されている。これらは、その他の遺構出土の瓦同様、桶巻き作り〔佐原前掲同〕と判断できる。また、104の凸面には一部に赤色顔料の付着が認められることから、この瓦は隣接する下北方塚原第2遺跡で想定された〔宮崎市教育委員会編2011〕のような軒先に使用された平瓦である可能性がある。

遺構外からは、図示したほかにも多くの遺物が出土している。小片が多いものの、古代に位置付けられるものが主体である。



第18図 遺構外出土遺物実測図② (S=1:3)

【参考文献】

- 大野市教育委員会編 2008『牛頭原跡群 総括報告書Ⅰ』大野城市文化財調査報告書第77集 大野城市教育委員会
 佐原真 1972「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻第2号 日本考古学会
 竹中克繁 2010「日向国における古代土器の変遷」『先史学・考古学論究』V下巻 龍田考古学会
 中世土器研究会 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
 堀田孝博 2012「宮崎平野部における平安時代の土器について—土師器供膳具を中心に—」『宮崎考古』第23号 宮崎考古学会
 宮崎市教育委員会編 2008『下村窯跡群報告書Ⅱ 遺物編』宮崎市文化財調査報告書第72集 宮崎市教育委員会
 宮崎市教育委員会編 2011『下北方塚原第2遺跡』宮崎市文化財調査報告書第82集 宮崎市教育委員会

第1表 出土土器観察表①

施設名 （開発号）	番号	遺構名	種別	法線cm(↑)板厚	色	調査	焼成	施下(上・中・下・壁)					編号	実測 番号	
								外面	内面	A	B	C	D	E	
P34 第8回	7	SC11	泥窓	(15.0)	-	灰灰	燒成	白	白	3	1	無	無	無	92
	8	SC15	泥窓	-	-	灰白	燒成	白	白	無	多	少	少	少	90
	9	SC15	千枚土	-	-	灰白	燒成	白	白	無	少	少	少	少	57
	10	SC15	千枚土	(6.0)	-	灰白	燒成	白	白	無	少	少	少	少	89
	11	SE1	土器底	-	-	灰白	燒成	白	白	無	少	少	少	少	1
	12	SE1	土器底	(12.8)	6.0	(4.7)	に灰・白	に灰・白	白	無	少	少	少	少	31
	13	SE1	土器底	(13.0)	5.6	4.8	に灰・白	に灰・白	白	無	少	少	少	少	32
	14	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	8
P35 第9回	15	SE1	土器底	(13.2)	5.0	5.0	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	SE1-15
	16	SE1	土器底	(12.0)	6.0	(4.15)	に灰・白	に灰・白	白	無	少	少	少	少	16
	17	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	34
	18	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	SE1-20 單面
	19	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	45
	20	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	SE1-30
	21	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	SE1-8
	22	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	5
	23	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	SE1-3
	24	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	29
P39 第10回	25	SE1	土器底	(13.2)	5.9	4.6	2.5/3.2	2.5/3.2	2.5/3.2	無	少	少	少	少	27
	26	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	SE1-28
	27	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	9
	28	SE1	土器底	(10.8)	6.1	4.0	2.5/3.6	2.5/3.6	2.5/3.6	無	少	少	少	少	42
	29	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	SE1-4
	30	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	3
	31	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	SE1-1
	32	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	2
	33	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	46
	34	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	SE1-24
P40 第11回	35	SE1	土器底	(13.5)	6.8	6.0	2.5/3.6	2.5/3.6	2.5/3.6	無	少	少	少	少	14
	36	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	53
	37	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	SE1-11
	38	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	無	少	少	少	少	53
	39	SE1	土器底	-	(7.8)	-	に灰・白	に灰・白	白	無	少	少	少	少	41
	40	SE1	土器底	-	(9.3)	-	に灰・白	に灰・白	白	無	少	少	少	少	44
	41	SE1	土器底	(17.4)	(14.7)	(11.8)	2.5/3.6	2.5/3.6	2.5/3.6	無	少	少	少	少	SE1-6、内壁・外壁、 鉢形切削削痕
	42	SE1	土器底	-	(14.5)	-	2.5/3.6	2.5/3.6	2.5/3.6	無	少	少	少	少	50
	43	SE1	土器底	(17.4)	-	-	に灰・白	に灰・白	白	工具ナ	少	少	少	少	SE1-33
	44	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	ナコナ	少	少	少	少	55
P41 第12回	45	SE1	土器底	(26.7)	-	-	燒成	に灰・白	白	コナナ	少	少	少	少	38
	46	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	コナナ	少	少	少	少	85
	47	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	コナナ	少	少	少	少	87
	48	SE1	土器底	-	-	-	燒成	に灰・白	白	コナナ	少	少	少	少	86

◎計上 A: 開発小号 B: 施下 C: 鉢形 D: 燒成 E: 黒斑

第2表 出土土器観察表②

測量区 測量番号	番号	遺構名	種類	法算cm()	陶瓦	色調	焼成	調査				出土(上:東下:西)	参考	実測 高さ	
								外底	内面	A	B	C	D		
P40 第11回	48	SE1	土器底 井戸	(14.3)	—	黄灰	黄灰	直輪ナデ	直輪ナデのちむ	—	—	—	—	SE1.34	105
	49	SE1	土器底 井戸	—	8.2	黄灰	黄灰	直輪ナデ ヘラカズリ	直輪ナデ	少	多	—	—	SE1.25	17
	50	SE1	土器底 井戸	—	—	黄灰	黄灰	直輪ナデ	直輪ナデ	—	—	—	—	SE1.29	68
	51	SE1	土器底 井戸	—	—	黄灰	黄灰	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	SE1.31	100
	52	SE1	土器底 井戸	(13.9)	—	黄灰	灰	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	101
	53	SE1	土器底 井戸	—	—	黄灰	黄灰	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	49
	68	SE3	土器底 井戸	—	5.75	相	相	直輪ナデ	直輪ナデ	—	—	—	—	—	58
	69	SE4	土器底 井戸	—	—	SVR6/6	SVR6/6	直輪ナデ	直輪ナデ	—	—	—	—	—	56
	70	SE14	土器底 井戸	—	5.0	相	相	直輪ナデ	直輪ナデ	—	—	—	—	内面削出付着	11
	71	SE14	土器底 井戸	(6.8)	—	SVR6/6	SVR6/6	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	64
P48 第15回	72	SE4	土器底 井戸	—	—	灰	灰	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	88
	76	SH11	土器底 井戸	8.9	6.1	1.55	にぶく・相	直輪ナデ	直輪ナデ	2	—	—	—	—	71
	77	SH55	土器底 井戸	(7.7)	(5.5)	1.3	にぶく・相	直輪ナデ	直輪ナデ	多	—	—	—	—	—
	78	SH55	土器底 井戸	7.8	6.0	1.5	にぶく・相	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	70
	79	SH53	土器底 井戸	—	(7.0)	—	にぶく・相	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	73
	80	SH80	土器底 井戸	—	6.4	—	灰	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	78
	81	SH115	土器底 井戸	(15.3)	—	—	にぶく・相	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	77
	82	SH108	土器底 井戸	(3.0)	(7.0)	4.0	にぶく・相	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	75
	83	SH11	土器底 井戸	—	(7.0)	—	にぶく・相	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	62
	84	SH53	土器底 井戸	—	(6.9)	—	にぶく・相	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	67
P50 第16回	85	SH12	土器底 井戸	—	—	SVR7/6	SVR7/6	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	61
	86	SH78	土器底 井戸	(22.0)	—	—	にぶく・相	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	89
	87	SH80	土器底 井戸	—	—	SVR7/6	SVR7/6	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	72
	88	SH90	土器底 井戸	—	—	—	にぶく・相	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	104
	90	表土	土器底?	3.45	2.5	1.15	灰	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	63
	91	表土	土器底	—	—	5.5V/1	—	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	90
	92	—	土器底?	—	—	—	にぶく・相	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	66
	93	—	土器底?	(11.0)	—	N 5/	N 6/	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	96
	94	—	土器底?	—	—	N 6/	N 6/	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	93
	95	—	土器底?	—	—	N 7/	N 5/	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	94
	96	表土	土器底?	—	—	N 7/	N 5/	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	95
	97	表土	土器底?	—	—	N 5/	N 6/	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	97
	98	表土	土器底?	—	—	N 5/	N 6/	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	99
	99	表土	土器底?	—	—	N 5/	2.5GY7/1	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	100
P52 第17回	100	—	土器底?	—	—	SYH/1	SYH/1	直輪ナデ	直輪ナデ	少	少	少	少	—	91

※附注 A: 内面小字: B: 灰石・右肩 C: 鞍石・内側右 D: 前傾 E: 后傾

第3表 出土陶磁器観察表

測量日 回番号	番号	遺構等	種別 法量cm() 條元				時間	備考	実測 番号
			直 径	上 口 徑	底 径	高 度			
P40 第11回	54 55 56	SE1 SE1 SE1	縫隙陶片 縫隙陶片 縫隙陶片	— — —	— — —	— — —	小凹のため不明 小凹のため不明 小凹のため不明	施錫 施錫 施錫	81 82 83

※()は残存法量

第4表 出土瓦観察表

測量日 回番号	番号	遺構等	種別 法量cm() 條元				時間	備考	実測 番号	
			直 径	上 口 徑	底 径	高 度				
P40 第11回	57 58 59 60 61 62	SE1 SE1 SE1 SE1 SE1 SE1	平瓦 平瓦 平瓦 平瓦 平瓦 平瓦	— — — — — —	— — — — — —	— — — — — —	椅子口タキシ、タテケズリ 椅子口タキシ 椅子口タキシ、ナデ 椅子口タキシ、ナデケズリ 椅子口タキシ ナデ	縫隙瓦、タテケズリ 縫隙瓦、タテケズリ 縫隙瓦、ナデタチケズリ 縫隙瓦、タテケズリ 縫隙瓦 縫隙瓦	SE1-32 施錫タテケズリ SE1-10 施錫タテケズリ SE1-18 施錫タテケズリ SE1-5 SE1-9	26 21 24 36 23 20
P40 第12回	73	SE5	平瓦	—	—	—	椅子口タキシ、タテケズリ	ナデ、タテケズリ	凸出の一部に鍍錫瓦が施有	39
P40 第13回	74	SE3	軒瓦類?	—	—	—	ナデ	ナデ		43
P50 第16回	80	SHRS	平瓦	—	—	—	椅子口タキシのナデ	縫隙瓦、タテケズリ	施錫タテケズリ	89
P53 第18回	101	一級	平瓦	—	—	—	椅子口タキシのナデ	縫隙瓦、タテケズリ	施錫タテケズリ	47
	102	表土	平瓦	—	—	—	椅子口タキシ	縫隙瓦、ナデ	施錫瓦	60
	103	表土	平瓦	—	—	—	椅子口タキシのナデ、タテケズリ	ナデ、タテケズリ	施錫タテケズリ	25
	104	表錫瓦	軒瓦平瓦?	—	—	—	椅子口タキシのナデ、タテケズリ	縫隙瓦、ナデ、タテケズリ	凸出の一部に赤色加附付有	79

第5表 出土石器観察表

測量日 回番号	番号	遺構等	石種	石材	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	実測 番号
P28 第4回	1	X切	砂岩	風化物	3.40	1.85	0.60	2.9	F2Gr-No.8	118
	2	X切	砂岩	風化物	4.70	2.35	0.85	10.4	EGr-No.16	116
	3	X切	砂岩	砂岩	3.25	3.45	1.00	9.5	EGr-No.17	117
	4	X切	砂岩	砂岩	3.80	4.25	1.00	20.0	EGr-No.10	115
	5	X切	砂岩	砂岩	3.50	4.00	1.10	11.5	EGr-No.14	114
	6	塊切	砂岩	砂岩	3.10	4.70	1.50	16.9	AIG-No.2	113
P41 第12回	83	SE1	火打石	火打?	3.00	2.40	1.60	13.4		112
	64	SE1	台石	砂岩	10.73	(7.40)	(5.85)	1740.01	全体に粗熱による赤変、一部に剥落が厚く付着	111
	65	SE1	台石	砂岩	10.80	(13.75)	(9.55)	(1520.0)	全体的に粗熱による赤変、部分的に黒変	109
P42 第13回	66	SE1	砾石	砂岩	9.25	(8.85)	(5.70)	(440.0)	全体的に粗熱による赤変	110
	67	SE1	砾石	砂岩	10.90	(6.75)	(4.75)	(480.0)	全体的に粗熱による赤変	107
P48 第15回	75	SE4	砾石	砂岩	10.020	(7.95)	(7.00)	(7200)		108

※()は残存法量

第Ⅲ章　まとめ

第1節 確認された遺構と遺物

今回の調査では、縄文時代早期、旧石器時代、古代の遺構と遺物のほか、近世のものとみられる遺構が確認された。古代の遺構と遺物がもっと多く、遺構には溝状遺構、土坑、ピットがある。これらの年代は、遺構床面付近から多くの遺物が出土した溝状遺構1がそれら遺物の年代から9世紀末から10世紀前葉に、完形に近い土師器が出土したSH11、SH55が12世紀中葉から末に位置付けられるほかは、出土遺物が少なく小片が多いことから明確にしがたい。ただし、出土した当該時期の遺物は、8世紀末ないし9世紀前葉ころから12世紀中葉から末のものである（註1）ため、そのほかの遺構の年代はこの時期幅の中に取まるものと思われる。その中では9世紀末から10世紀前葉のものがおもであることから、下北方下郷第8遺跡で確認された古代の遺構は9世紀末から10世紀前葉を中心とするものであるということができる。

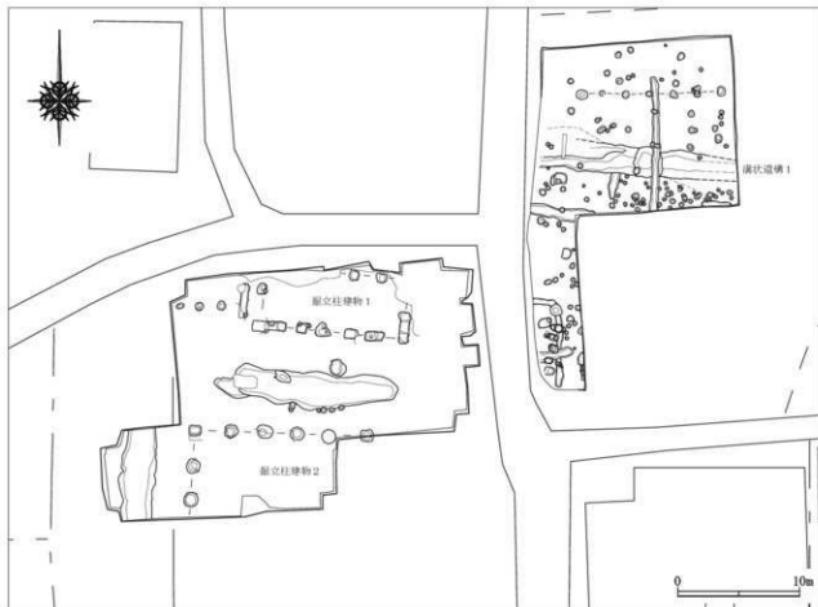
第2節 墨書き土器について

今回の調査では、5点の墨書き土器が出土した（註2）。柴田博子らによる集成によれば、下北方町の丘陵上は宮崎市内でも比較的墨書き土器がまとまって出土する地区である〔柴田1996など〕。出土した5点の墨書き土器は、いずれも土師器壊である。この中で墨書き内容を確認できるのは、溝状遺構1出土の「寺」墨書き土器、「〇」墨書き土器である。前者は体部外面に正位で墨書きされており、字画の一部が省略されている。比較的なれた筆致であるが、識字者の手によるものか判断はしがたい。このほか（79、91、図版14-6）は、いずれも欠損によって字を判断できない。文字の残存部分の特徴と、地方においては一遺跡では同一の文字がまとまって出土するという傾向を考えればいずれも「寺」になる可能性を否定できないものの、不明確である。このうち、79、図版14-6は底部外面へ墨書きされている。小片であるために時期的な位置付けが難しいものもあるが、いずれも9世紀後半から10世紀前葉に位置付けられよう。ちょうど日向国内でも墨書き土器が増加する時期にあたる資料である〔柴田1997〕。また、このほか、墨書きにかかる遺物として、転用窯の可能性がある溝状遺構1出土の須恵器蓋壊（47）がある。遺跡周辺に識字層あるいは墨書きをおこなう人間が存在したことを示すものであろう。

第3節 溝状遺構1と下北方塚原第2遺跡

今回調査で確認された溝状遺構1は、隣接する下北方塚原第2遺跡で確認された遺構とのかかわりにおいて注目できる。下北方塚原第2遺跡は、今回調査区の南西側に隣接し、溝状遺構1とほぼ同時期の2棟の大型掘立柱建物などが確認された。詳しくは報文を参照されたいが、これらの遺構は、古代寺院の可能性が高いと考えられている〔宮崎市教育委員会編2011〕。

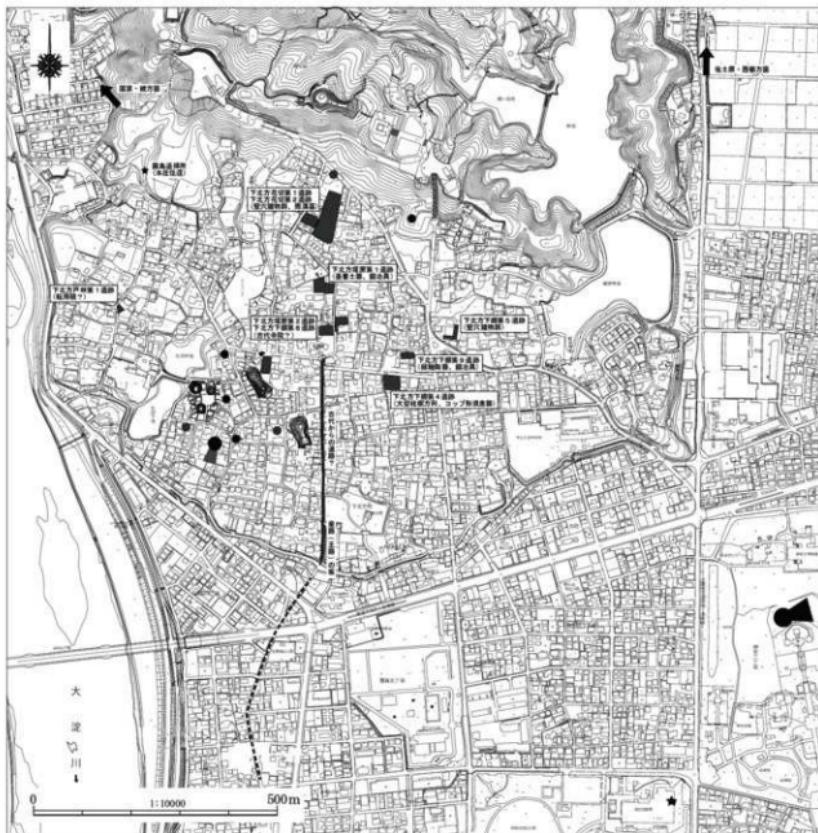
溝状遺構1とこの2棟の建物とは、長軸方向がほぼ平行であること、遺構の同時期性、出土遺物の組成や出土状況の類似性から、何らかの関連性を有する一連の遺構群として捉えうる可能性が高い（第19図）。こうした場合改めて注目できるのは、溝状遺構1および下北方塚原第2遺跡の掘立柱建物2に伴う溝状遺構からの遺物の出土状況である。この2つの遺構では、灯明皿を多く含む土師器壊が完形やそれに近い状態で出土している。中には壊が重ねた状態の



第19図 下北方下郷第8遺跡と下北方塚原第2遺跡の位置関係(S=1:400)

ものもあり、第II章でも示した通り意図的な廃棄行為にともなうものとみられる。溝状遺構1出土の「寺」、「○」墨書土器も灯明皿として用いられていた。これら多くの遺物の廃棄行為が使用（廃棄）された場にかかわる行為とみなすことが可能であれば、下北方下郷第8遺跡、下北方塚原第2遺跡で確認された一連の遺構群の性格を知るうえで「寺」字墨書土器が持つ意義は大きい。すなわち、この「寺」字が下北方塚原第2遺跡の建物が古代寺院であるとするこれまでの検討の蓋然性をさらに高めたものといえる。加えて、下北方塚原第2遺跡のある場所は、中世から明治期には沙汰寺という寺院であったこと、現在も平景清を祭る景清廟や公民館として利用されていることも極めて示唆的である。

溝状遺構1の具体的な機能や性格については明確にしえないが、下北方塚原第2遺跡で確認された建物群を含む施設（古代寺院）の区画（寺域など）を示す区画溝のようなものであった可能性がある。その場合、寺域は下北方塚原第2遺跡の位置する下北方自治公民館および景清廟敷地よりさらに広がっていたものと判断できる。周辺は現在住宅地となっており、面的な調査は難しいが、今後調査が必要となった場合には、これを念頭においておく必要があろう。今回調査で確認された、ほかの遺構もこれらに関係する可能性があるが判然としない。



第20図 下北方の主要古代遺跡 (S=1:10000)

第4節 古代下北方丘陵の様相と展望

下北方丘陵南端平坦面ではこれまでに多くの古代遺跡が確認されている。それらの調査結果などから、周辺が宮崎郡衙を含む古代宮崎郡の中心地であったと推測されてきた。

今回調査地及び下北方塚原第2遺跡を含む推定古代寺院はその平坦面の中心付近に位置している。また、この場所から平坦面を南北に貫くように南に伸びる直線道路が現存するが、これは位置関係からみて推定古代寺院とともに古代から存在していたものと考えられる。古代の下北方丘陵南端平坦面ではこの両者を中心とした、人々の生活域が形成されていたものと想定されよう。調査箇所の多寡も考慮すべきではあるが、現在までの調査結果では推定古代寺院北側、東側で竪穴建物群が多く確認されており集落域が形成されていた可能性が高い。直線道路より

西側は下北方古墳群が存在するため、大規模な土地利用はなされなかつたものと思われる。ただし、古墳群よりさらに西側でも転用硯の可能性がある須恵器が出土した戸林第1遺跡など多くの古代の遺物が確認されていることから古代において何らかの土地利用がなされていたと判断できる。

周辺にその存在が想定される宮崎郡衙については、いまだその存在や場所を示す具体的な調査成果はない。その追求については、今後の調査研究をまつほかないが、上記のように推定古代寺院と直線道路を中心とする土地利用がなされていた可能性があること、下北方古墳群の存在など踏まえれば、直線道路より東側の一帯に存在したのではないだろうか。一帯には、神武天皇の寓居跡との伝説のある皇宫神社あるいは、城丸、堀之内、高下（こうげ）といった地名が残る場所（註3）があり、その付近に候補地を求めることが可能であろうか。

【註】

- 1 遺物の年代的位置付けに関しては、おもに堀田孝博 2012 を参照した。
- 2 墨書き土器については、宮崎産業経営大学の柴田博子教授に種々のご教示を得た。本節の内容はそれによるところが大きい。
- 3 これらの地名が、どの時代まで遡るものかは不明であり、その点留意が必要である。とくに、前2者は中世居館などの存在を示唆している可能性もある。また、高下は郡家が転訛したものと想定ができるものの、単に地形などを示す地名の可能性もある。

【参考文献】

- 柴田博子 1997 「宮崎県内出土の墨書き土器と墨書き土器研究」『宮崎考古』第 15 号 宮崎考古学会
柴田博子・中野和浩・東憲章 1998 「日向國出土の墨書き土器」『宮崎県史 通史編 古代 2』宮崎県
下北方町の歴史を訪ねる会編 2004 『下北をあるく』 下北方の歴史を訪ねる会
奈良文化財研究所編 2020 『第 23 回古代官衙・集落研究会報告書 灯明畠と官衙・集落・寺院』奈良文化財研究所研究報告第 26 冊
奈良文化財研究所
堀田孝博 2012 「宮崎平野部における平安時代の土器について—土師器供膳具を中心に—」『宮崎考古』第 23 号 宮崎考古学会
宮崎市教育委員会編 2011 『下北方塚原第 2 遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 82 集 宮崎市教育委員会
宮崎市教育委員会編 2012 『宮崎市内遺跡発掘調査報告書』宮崎市文化財調査報告書第 89 集 宮崎市教育委員会
宮崎市教育委員会編 2015 『下北方花切第 2 遺跡』宮崎市文化財調査報告書第 106 集 宮崎市教育委員会

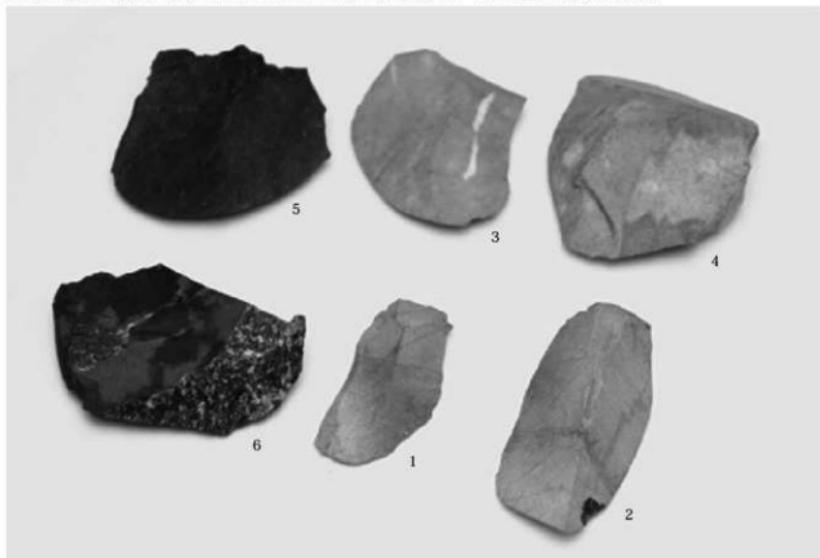


下北方下郷第8遺跡調査区空撮写真（下が北）

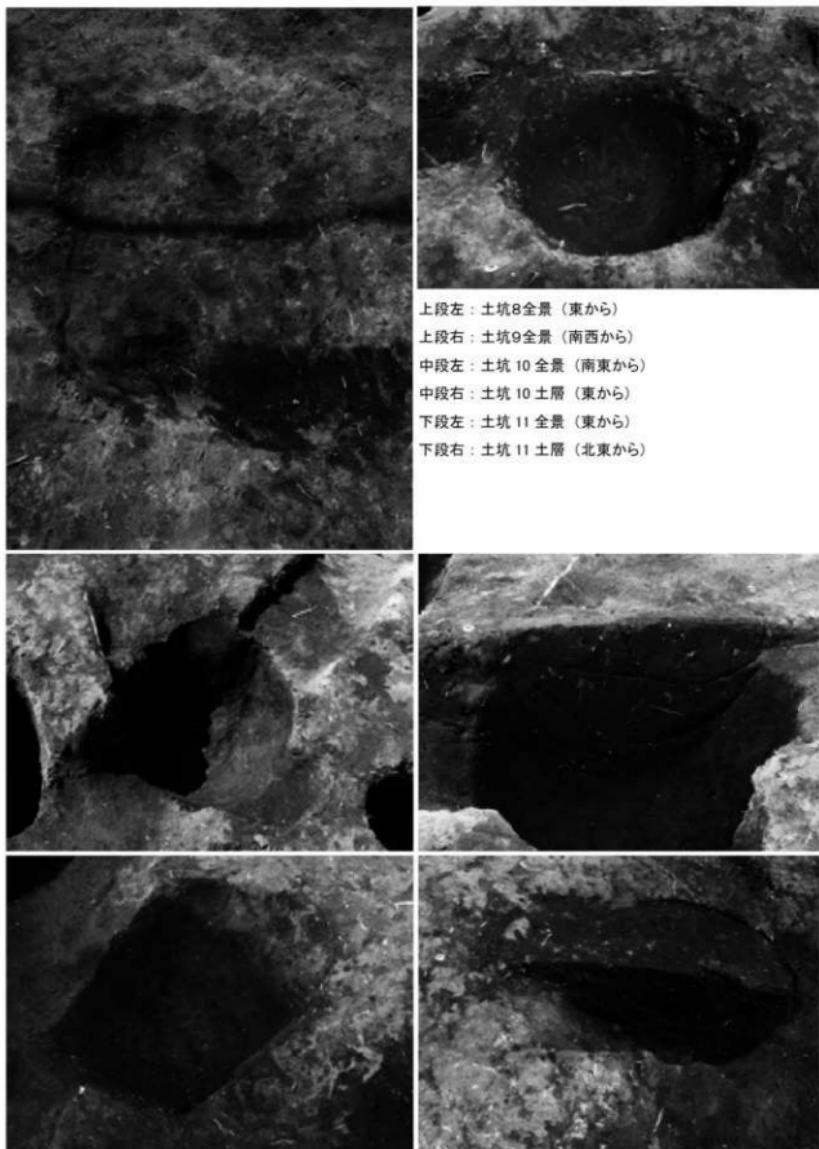
図版2



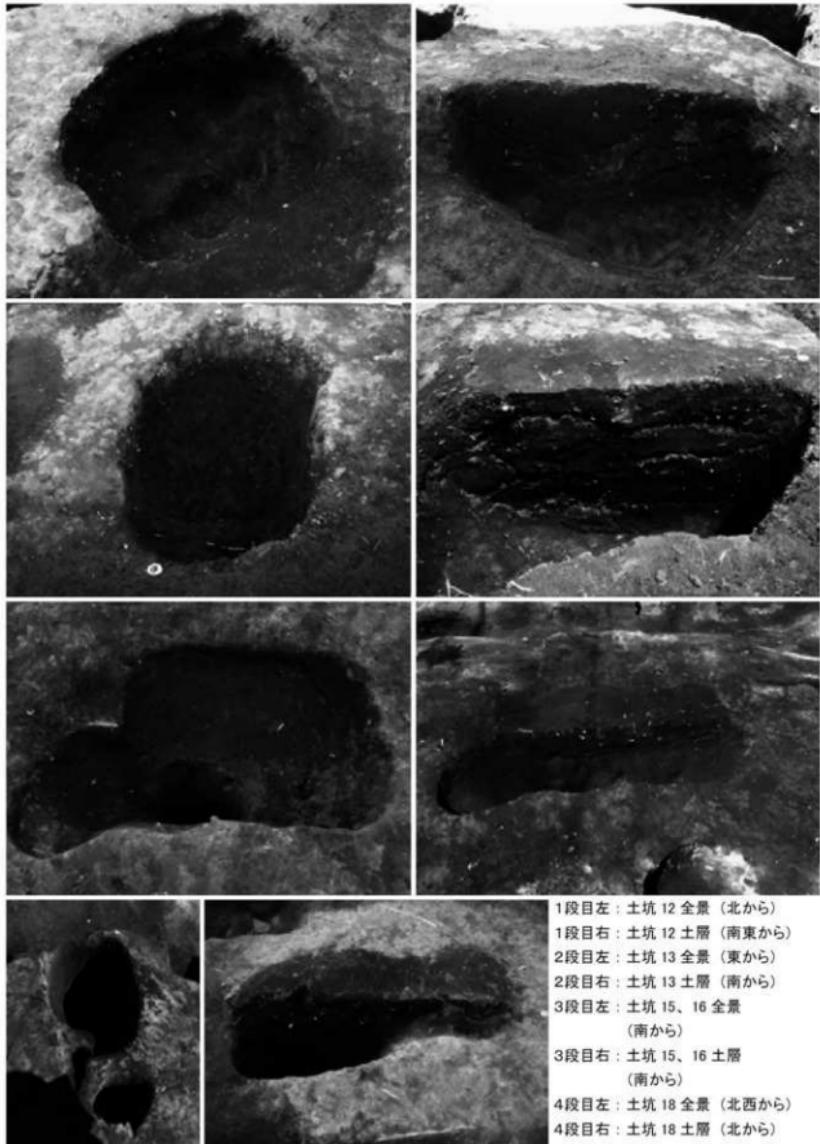
左：旧石器出土状況と土層、右上：旧石器出土状況1（X層）、右下：旧石器出土状況2（X層）

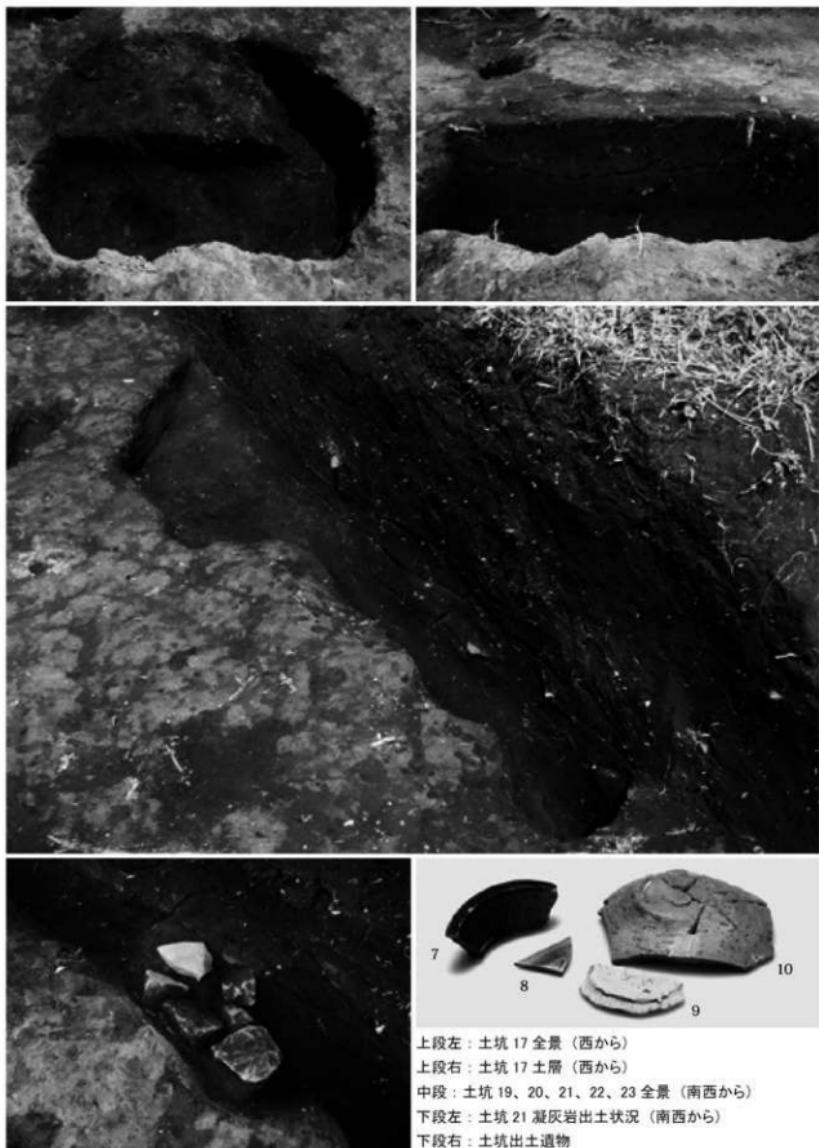


縄文時代早期、旧石器時代の遺物

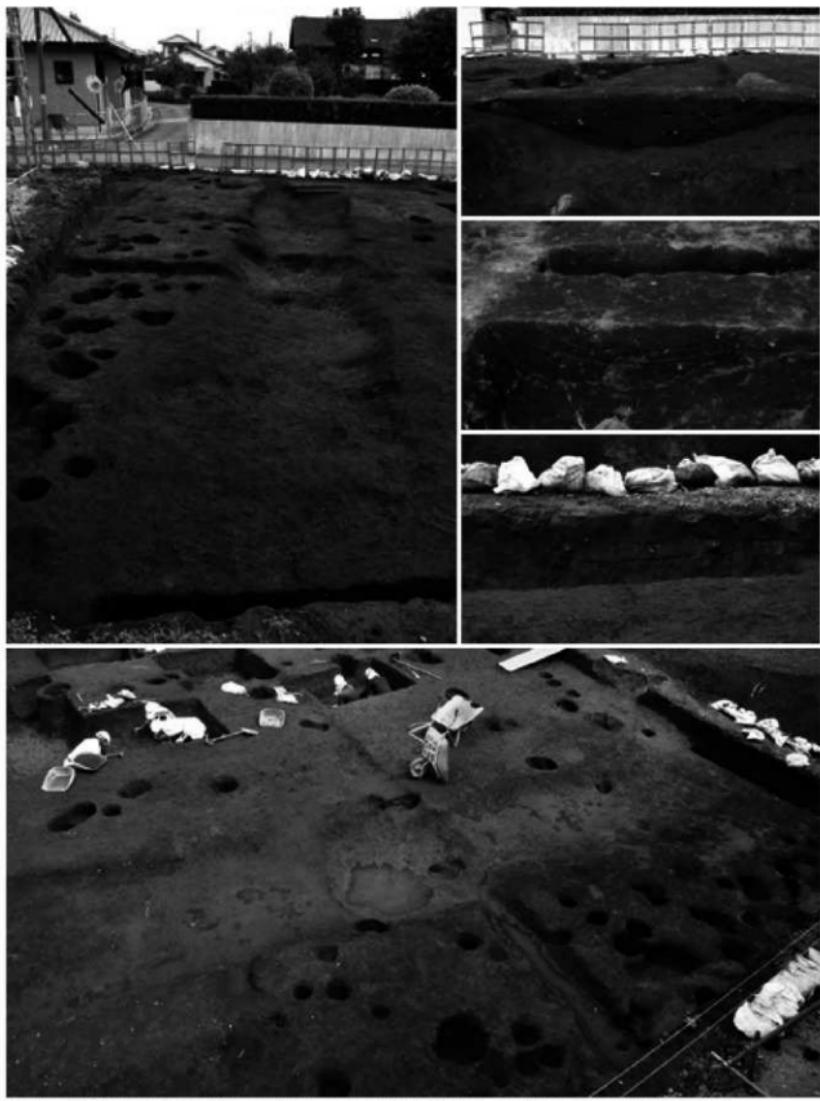


図版4



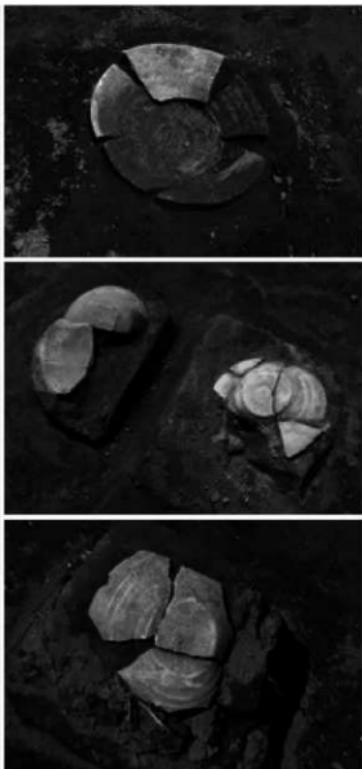


図版6



上段左：溝状造構1全景（東から）、上段右上：同土層断面1（東から）、上段右中：同土層断面2（東から）

上段右下：同土層断面3（西から）、下段：溝状造構1（南西から、中央に見えるのが土坑状の掘り込み）



左上：溝状造構1調査状況（西から）

左下：同遺物出土状況1（南東から）

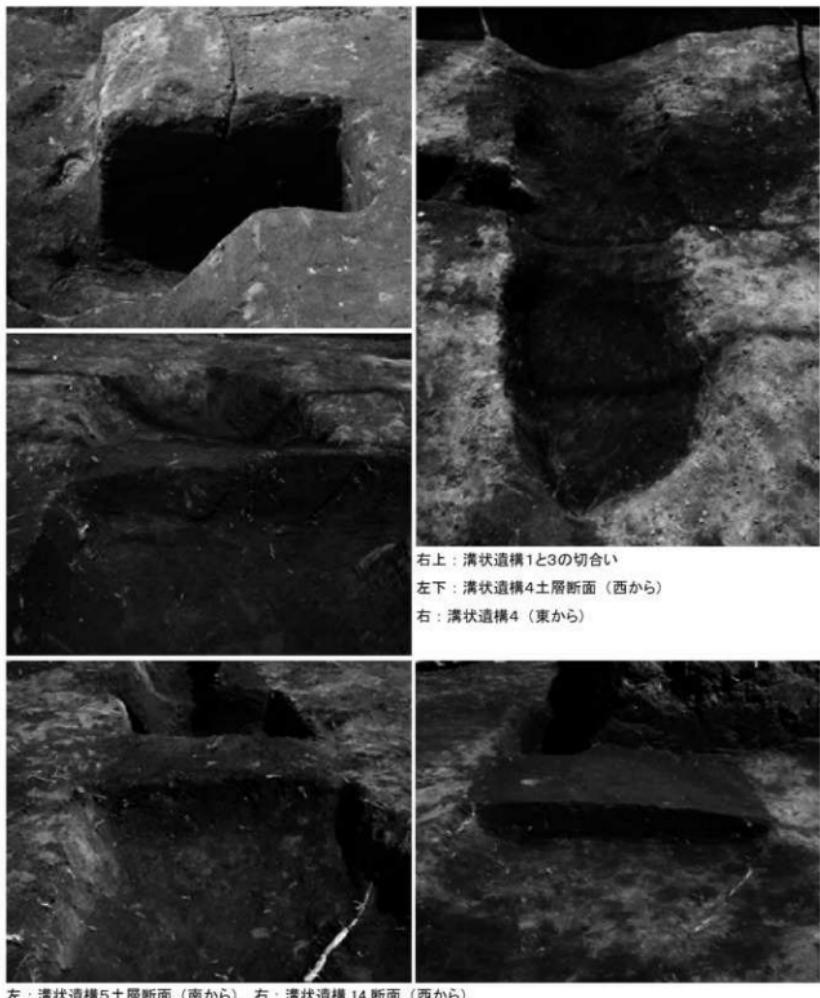
右上：同遺物出土状況2（北から）

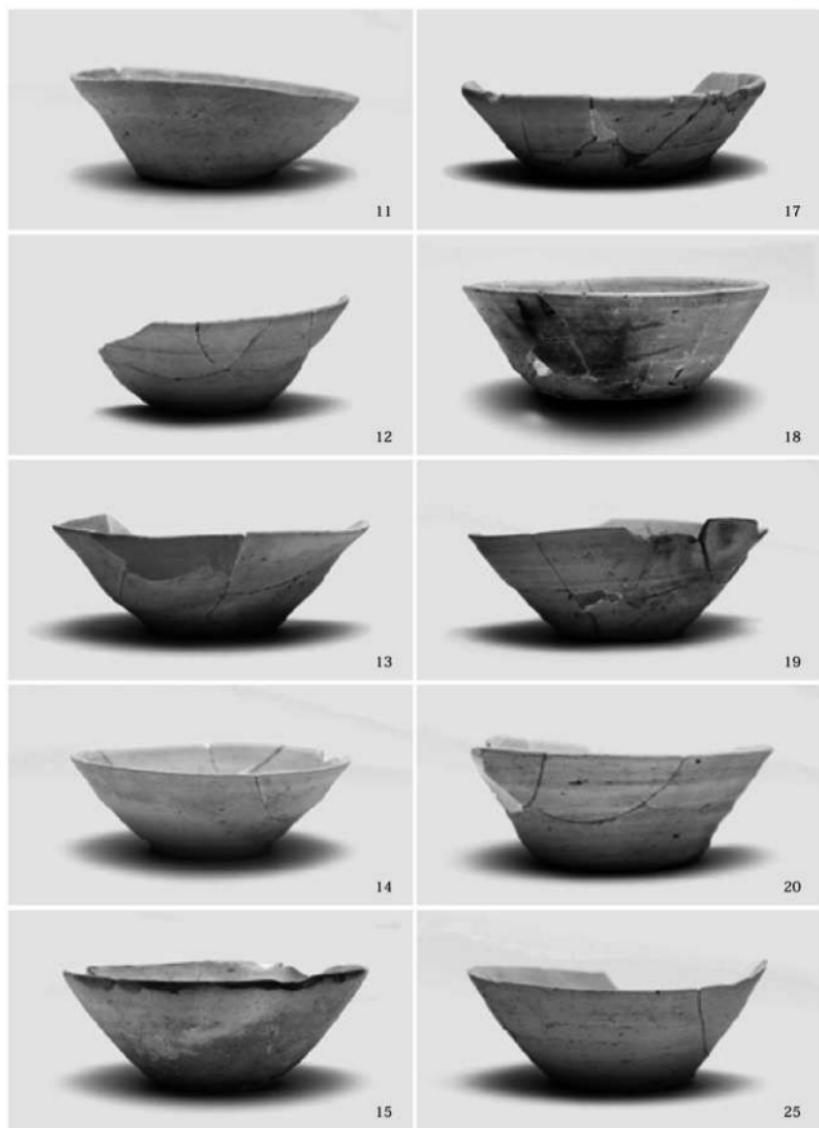
右中：同遺物出土状況3（東から）

右下：同遺物出土状況4（北から）

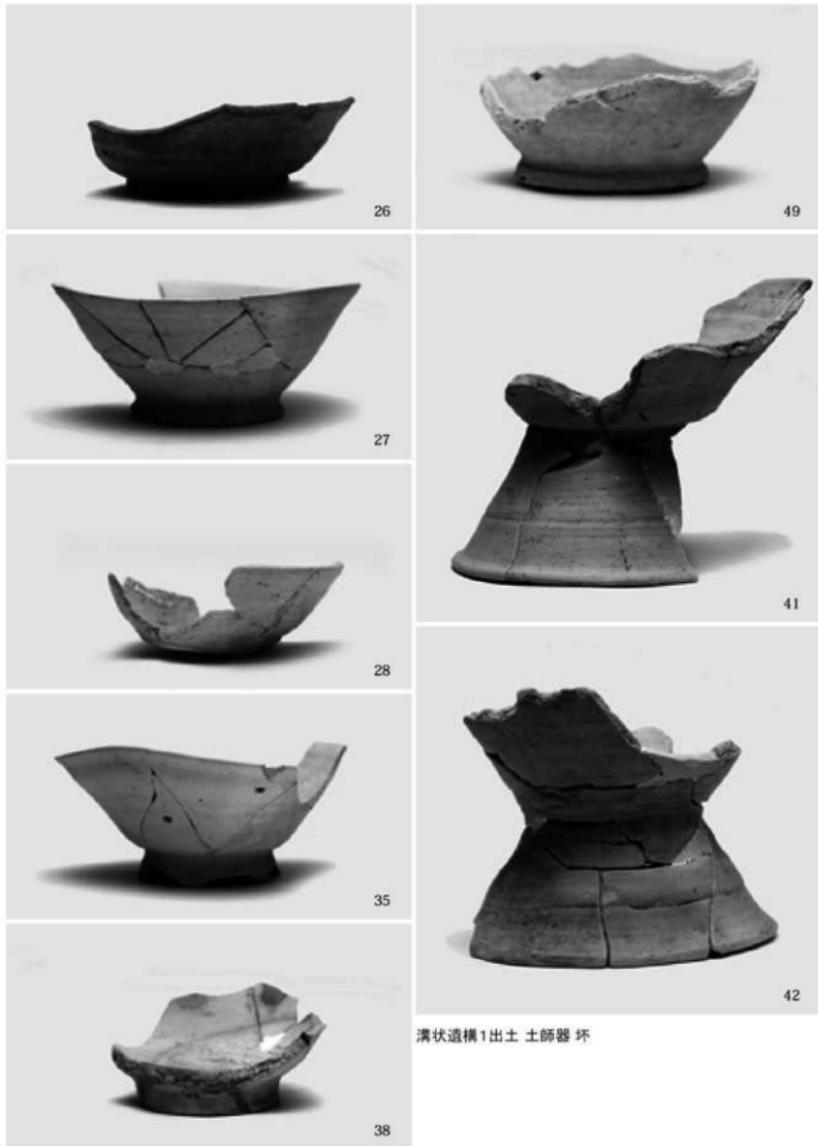


図版8





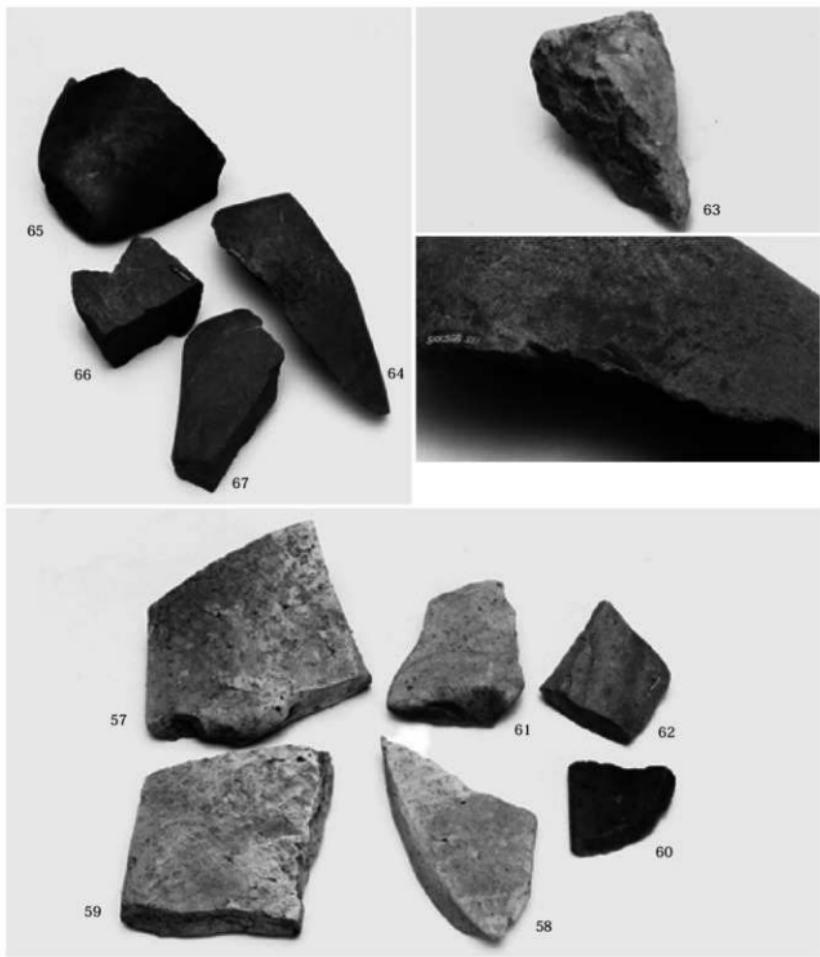
溝状遺構1出土 土師器 坯



溝状造構1出土 土師器 坯



图版 12



上段左：溝状造構1出土石器、上段右上：同出土火打石、上段右下：同出土石器鐵銹付着部分（No.64）

下段：同出土 瓦

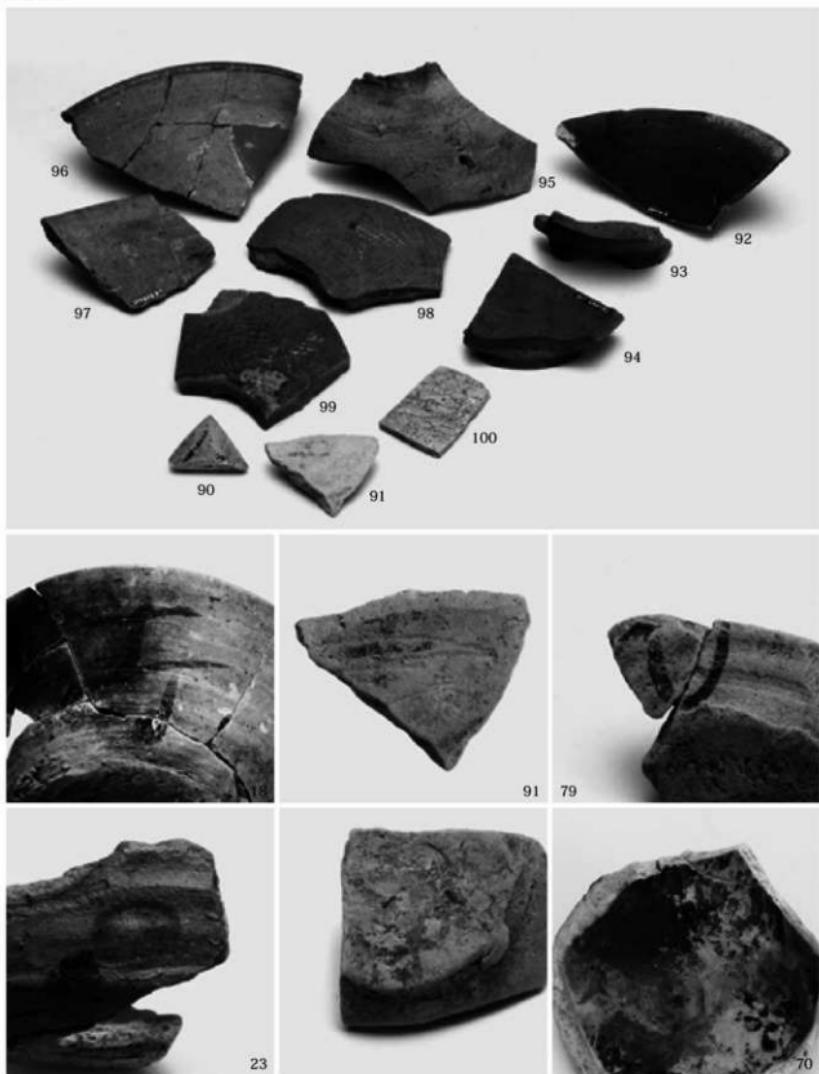


溝状遺構出土遺物



ピット出土遺物

图版 14



上段：遣横外出土遗物

中段：墨书土器

下段：墨书土器、煤付着土器

報告書抄録

ふりがな	しもきたかたしもごうだいなないせき・しもきたかたしもごうだいはちいせき								
書名	下北方下郷第7遺跡・下北方下郷第8遺跡								
副書名									
巻次									
シリーズ名	宮崎市文化財調査報告書								
シリーズ番号	第140集								
編集者名	竹中克繁、西郷剛広（編）								
発行機関	宮崎市教育委員会								
所在地	〒889-1696 宮崎市清武町西新町1番地1				TEL 0985-85-1178				
発行年月日	2022年3月31日								
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード市町 村	遺跡番号	北 緯	東 経	調査期間	調査面積		
しもきたかたしもごうだいなないせき 下北方下郷第7遺跡	みやざきしもきたかたまちしもごう 宮崎市下北方町下郷 6010番地 5ほか	45201	2-165	31° 56' 34"	131° 24' 52"	H.27.9.9 ～ H.27.10.2	33.2m ²		
しもきたかたしもごうだいはちいせき 下北方下郷第8遺跡	みやざきしもきたかたまちしもごう 宮崎市下北方町下郷 5981-1、5984-1			32° 00' 43"	131° 28' 36"	H.28.7.25 ～ H.28.9.20	276m ²		
調査原因	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項				
下北方下郷第7遺跡	宅地造成	散布地	古代 中世	土坑 ピット	土師器 陶磁器	弥生時代末から近世 まで、各時代の遺物 が出土。			
下北方下郷第8遺跡	集合住宅建設	散布地	古代	溝状遺構 土坑	墨書き器 灯明皿	溝状遺構は隣接地で 確認された大型建物と 関連する可能性がある。 埋土から「寺」 墨書き器が出土。			
要約	下北方下郷第7遺跡	調査面積が狭小なこともあります。検出遺構は土坑1基、ピット13基にとどまるが、古墳時代の土師器や古代須恵器、中世陶磁器、近世瓦など長期にわたる各時代の遺物が出土している。							
	下北方下郷第8遺跡	古代の土坑15基、溝状遺構7条のほか、ピット多数が検出された。遺物は墨書き土器を含む古代の土師器を中心に須恵器、縄文陶器、瓦などが出土している。							

宮崎市文化財調査報告書第140集
下北方下郷第7遺跡・下北方下郷第8遺跡

2022年3月
発行 宮崎市教育委員会